石川県金沢市・石川郡野々市町

扇が丘ハワイゴク遺跡

1995

石川県立埋蔵文化財センター

扇が丘ハワイゴク遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

遺跡周辺の航空写真

例　言

1，本書は、石川県金沢市馬替１丁目、石川郡野々市町扇が丘地内に所在する扇が丘ハワイゴク遺跡の発掘調査報告書である。

2，本調査は伏見川中小河川改良工事（高橋川）に係る緊急発掘調査であり、石川県土木部河川課、及び伏見高橋川治水工事事務所の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3，現地調査は平成２年７月～同年11月にかけて第一次調査を、平成３年４月～同年７月にかけて第二次調査を実施した。

4，第一次調査は木立雅朗（当センター主事）が担当し、大藤雅男氏の協力を得た。第二次調査は木立と小阪　大（当センター嘱託）が担当し、市町村職員長期研修生の谷口克好氏（門前町教育委員会）の援助を得た。

5，金沢大学教育学部教授の藤　則雄氏には当遺跡の古環境に関して御教授いただいた。結果については、後日本報告される見込みである。

6，本遺跡出土遺物整理作業は平成４年度（社）石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った。

7，本書の執筆、編集は木立と端　猛（当センター主事）が行った。本報告書作成に際しては、谷口氏より多大な援助を得ている。また、センター諸氏の方々より多くの助言を得た。

打製石斧の石材に関しては、小島和夫氏より御教示を受けた。記して感謝したい。

8，本書挿図で用いた方位は座標北である。なお、本書では以下の略記号を用いている。

ＳＢ－掘立柱建物跡、ＳＤ－溝、ＳＫ－土坑、ＳＸ－不明遺構、Ｐ－ピット

9，本調査の出土遺物、記録資料等は当センターが一括して保管している。

目　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　自然環境
　第２節　歴史環境

第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 3
　第１節　調査の経緯
　第２節　調査の経過

第３章　遺　構 …… 6
　第１節　調査区の設定
　第２節　基本層序
　第３節　第一次調査の遺構
　第４節　第二次調査の遺構

第４章　遺　物 …… 20
　第１節　第一次調査出土遺物
　第２節　第二次調査出土遺物

第５章　おわりに …… 39

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　自然環境

扇が丘ハワイゴク遺跡は、石川県金沢市馬替一丁目と石川郡野々市町扇が丘にまたがって所在する。

石川県は、縦に細長い日本列島のほぼ中央に位置し、日本海に突出する能登半島とその基部にある日本三名山の一つ白山（標高2,702m）に特色づけられる。その白山からは、県下最長の河川である手取川が日本海に向け流れ出ており、扇径約15kmの大規模な手取川扇状地を形成している。

金沢市は、その石川県の中央からやや南よりに位置する県庁所在地であり、北陸の中心地である。市南東部の白山山系の山々を水源とする犀川、浅野川の二つの河川が市の中心部を平行して北西方向に流れており、これに挟まれた小立野台地の西端部に位置する金沢城跡、兼六園を中心として市街地が広がっている。

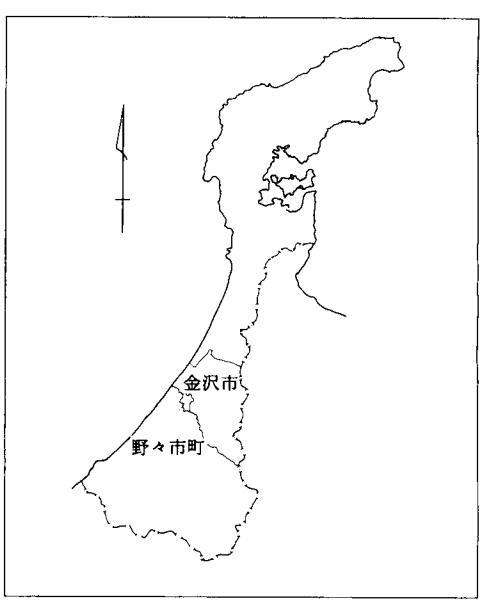
野々市町は、金沢市の南西部に接する町で、手取川扇状地の東部にあたる。県下で最も人口密度の高い自治体であり、金沢市との境、町の北東部を中心に商業地として発達すると共に、金沢市のベットタウンとして宅地化が進行している。

扇が丘ハワイゴク遺跡はその金沢市と野々市町の接する所、金沢市の中心部から犀川を挟んで南西方向に約５km離れた住宅地に立地している。地形的には、手取川扇状地の扇側部に位置している。かつては水田地帯であったが、遺跡の北約500mにある金沢工業大学を中心として学生の街として発達してきた。また、南に光が丘や額新町などの大規模な宅地が作られ、それらと金沢市の中心を結ぶ道路沿いにある本遺跡周辺は住宅地としても開発されるようになった。

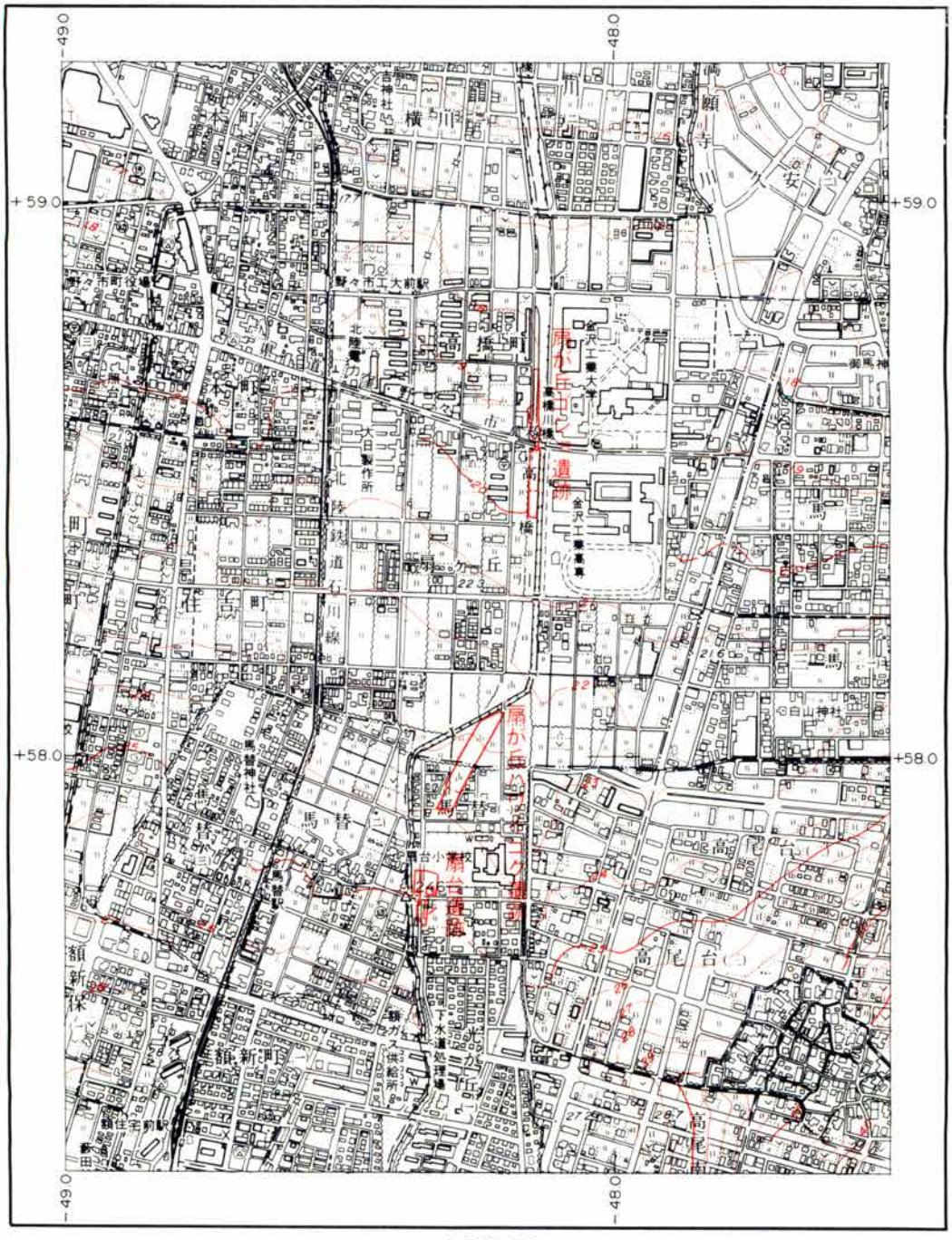
第２節　歴史環境

本遺跡の周辺は、地元で「ハワイゴク」、あるいは略して「ハワイ」と呼ばれていた。「ハワイゴク」の意味、字は不明であるが通称をとって遺跡の名称を「扇が丘ハワイゴク遺跡」とすることにした。

周辺の遺跡を概観すると、末松遺跡、清金アガトウ遺跡、粟田遺跡など手取川扇状地の扇央部に立地する遺跡からは、縄文土器の小片や打製石斧が散発的に出土している。また、末松遺跡、粟田遺跡、大額キョウデン遺跡では、条里制に伴うような南北、東西方向に延びる溝を検出している。



第１図　金沢市・野々市町位置図


-49.0
-48.0
+59.0
+58.0
野々市工大前駅
金沢工業大学
金沢工業高専
高尾台
馬替
額新町
1：25,000
0 100 500 1000m

第2図 遺 跡 の 位 置

第２章　発掘調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

高橋川は、鶴来町の後高山（標高647ｍ）に流れを発し、野々市町・金沢市の住宅街を貫流し、金沢市米泉町で伏見川に合流する延長約16kmの二級河川である。

高橋川の周辺は、昭和30年頃までは一面の水田地帯であった。当時、高橋川は幅の狭い川ではあったが、大雨等による被害は少なかったようである。昭和30年代、高度経済成長期に入ると列島改造ブームの中、日本国中で土地の造成が進み次々と山や水田が姿を消していった。石川県も例外ではなく、県都金沢市の周辺でその影響は顕著に表れた。特に、高橋川流域の金沢市南西部及び野々市町周辺の景観は最も大きく様変わりし、宅地造成や道路の整備により水田が次々と姿を消していった。

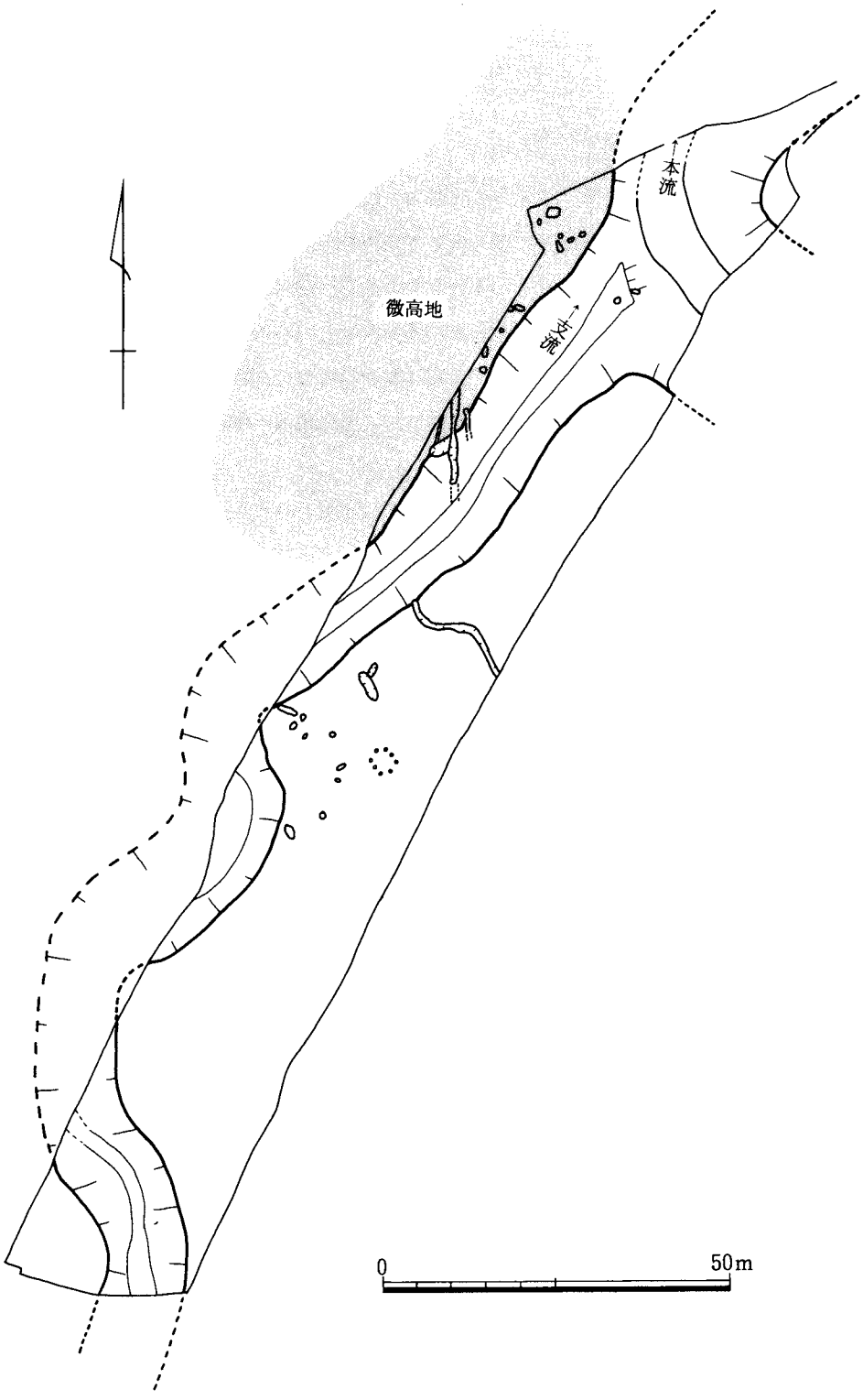
その結果、以前は水田に拠るところが大きかった高橋川の治水能力がその水田の消滅と共に低下してゆき、度々流域に被害を及ぼすようになった。そのため、石川県では昭和53年から本格的な高橋川の改良工事に取り組んでいる。

高橋川の改良工事が進められる中、昭和63年４月石川県伏見高橋川治水工事事務所より当センターに工事箇所における埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。同年５月、重機による試掘調査を実施、埋蔵文化財を確認し事前の発掘調査が必要な旨回答。翌平成元年度から工事に合わせ順次下流側から扇が丘ゴショ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡、扇台遺跡と発掘調査を進めていった。なお、平成５年度の大額キョウデン遺跡発掘調査の終了をもって伏見川中小河川改良工事（高橋川）に係る埋蔵文化財発掘調査の現地作業は完了している。

第２節　調査の経過

扇が丘ハワイゴク遺跡の発掘調査は、平成２年７月から11月にかけて 4,000㎡を対象に第一次調査が行われ、平成３年４月から７月にかけて第一次調査区の上流側 800㎡を対象に第二次調査が行われた。

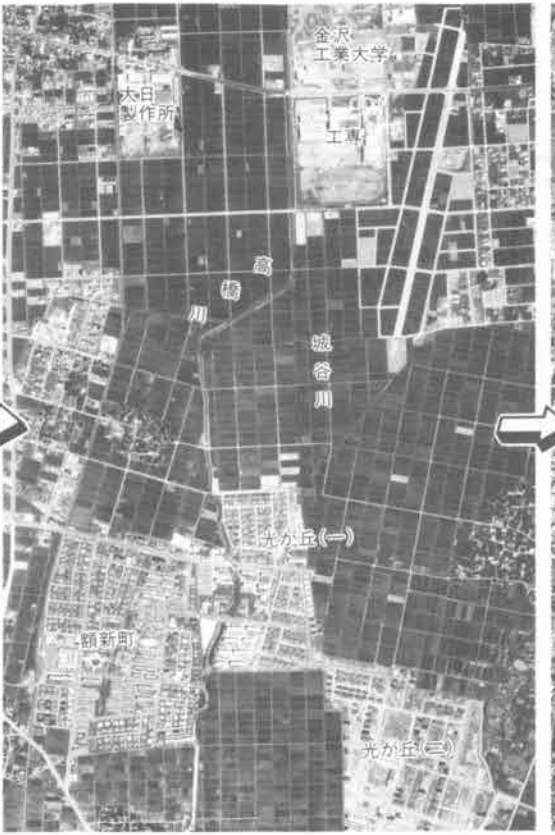
第一次調査区、第二次調査区とも遺跡の大部分を縄文時代の自然河道が占めており、その他の遺構はあまり検出されなかった。特に第一次調査では地盤が軟弱なこともあり上層から縄文時代以降の遺物は出土するものの明確な遺構面は確認されなかった。結局、縄文時代の自然河道の本流、支流、及びその合流部と縄文時代の地山面まで掘り込んでいた古墳時代前期の竪穴と思われる住居跡等の検出にとどまっている。第二次調査では、第一次調査区に水が抜けたせいもあってか比較的地盤がしっかりしており、鎌倉・室町時代、平安時代の遺構面を確認し、平安時代の掘立柱建物跡及び溝を検出している。また、第一次調査で検出された縄文時代の自然河道支流の続きも確認されている。



第３図　縄文時代の川跡模式図

①昭和22(1947)年の様子

周辺一帯は水田であり、馬替や高尾、額新保などの集落がみられる。水田が多いため、保水能力が今より高かった。



②昭和44(1969)の様子

金沢工業大学ができ、新しい道も整備されはじめる。額新町や光が丘などの大規模な町が作られている。川幅は広くなっているが、洪水の危険性は高まってゆく。

③平成4(1992)4月の様子

あたり一面が開発され、水田がかなり少なくなっている。保水能力はかなり弱まるが、高橋川の改良工事も進み、扇台小学校のすぐ北側までせまってきている。

第4図　高橋川周辺の移りかわり

第3章　遺　　構

第1節　調査区の設定

200m×25mと縦に長い長方形をした調査区であったので、調査区の形に合わせ任意に4mグリットを設定した。東西方向にアルファベットを、南北方向にアラビア数字を各杭に当て、グリット名は北東隅の杭名で示すことにした。

第2節　基本層序

調査の経過（第2章第2節）で述べたように、第一次調査では縄文時代晩期の遺構面より上層での遺構面の確認はできなかった。第二次調査では、第一次調査よりも調査条件が良く、また第一次調査の結果をふまえ層位的に調査を行うことができ、中世、古代の遺構面を確認することができた。第一次調査区内においても同様の遺構面が存在したものと思われる。以下、第二次調査区東壁の土層図（第5図）を基に扇が丘ハワイゴク遺跡の層位について述べてみたい。

Ⅱ、Ⅲ層（第5図7、8層）には中世の遺物が含まれる。この面で遺構検出を行ったが、鉄分の沈着による疑似畦畔を検出したのみで、明確な遺構は検出されなかった。また、疑似畦畔も時期を確定できず、中世以降のものとしか判断できなかった。

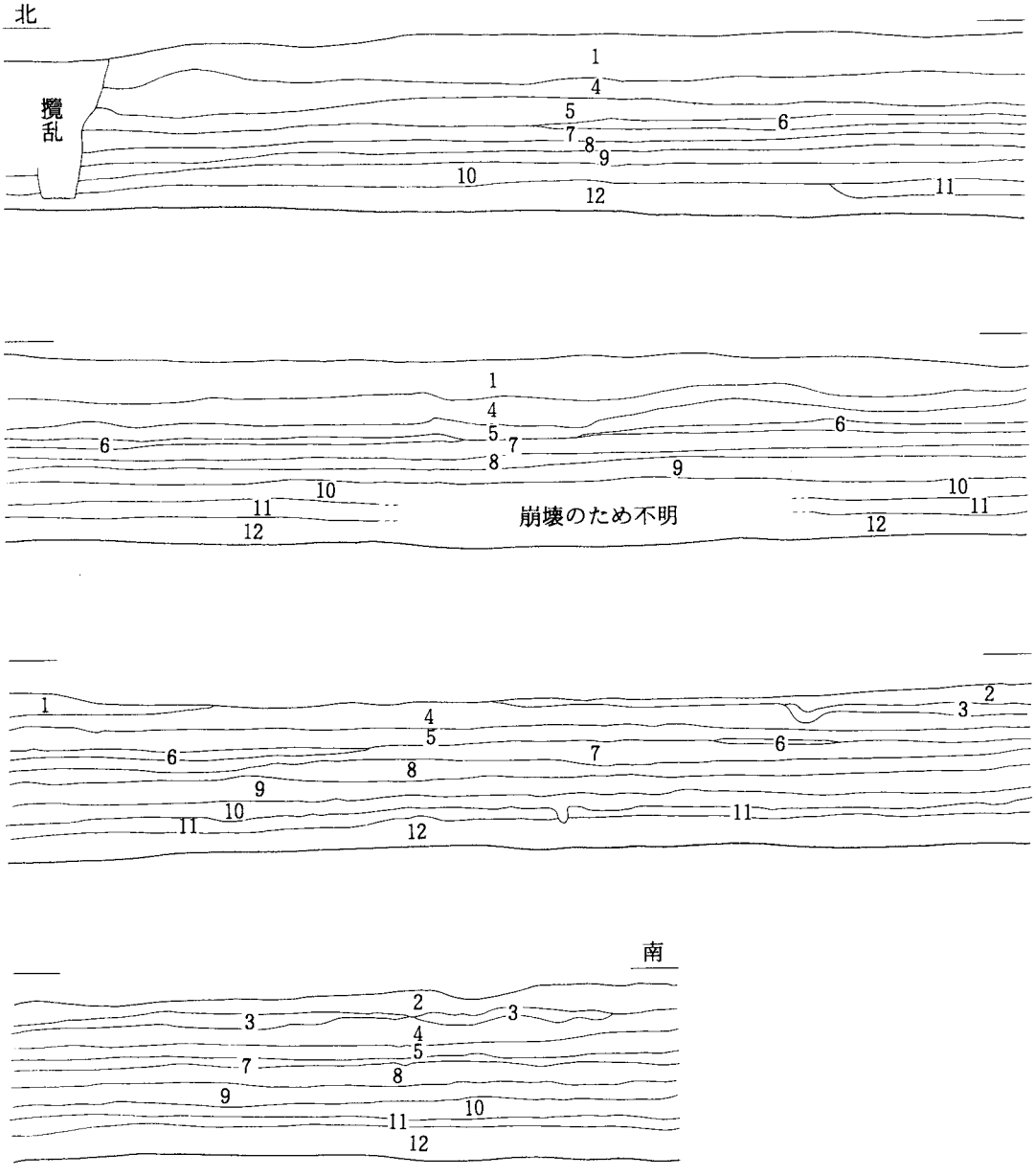
Ⅳ層（第5図9層）は古代の包含層である。この層の下面で平安時代の遺構面を確認し、掘立柱建物跡を検出している。また、条里制に伴う可能性のある南北方向に延びる溝も検出している。

Ⅴ層（第5図10層）は弥生時代の包含層である。第二次調査では遺構は確認できなかったが、第一次調査で検出した竪穴住居跡は、本来この面で検出されるべきものであったと思われる。

Ⅵ層（第5図11層）からは遺物の出土はなかったが、縄文時代晩期から弥生時代にかけての層と思われる。おそらくこの層の堆積により自然河道はほとんど埋まり、周辺は平らな土地になっていたであろう。

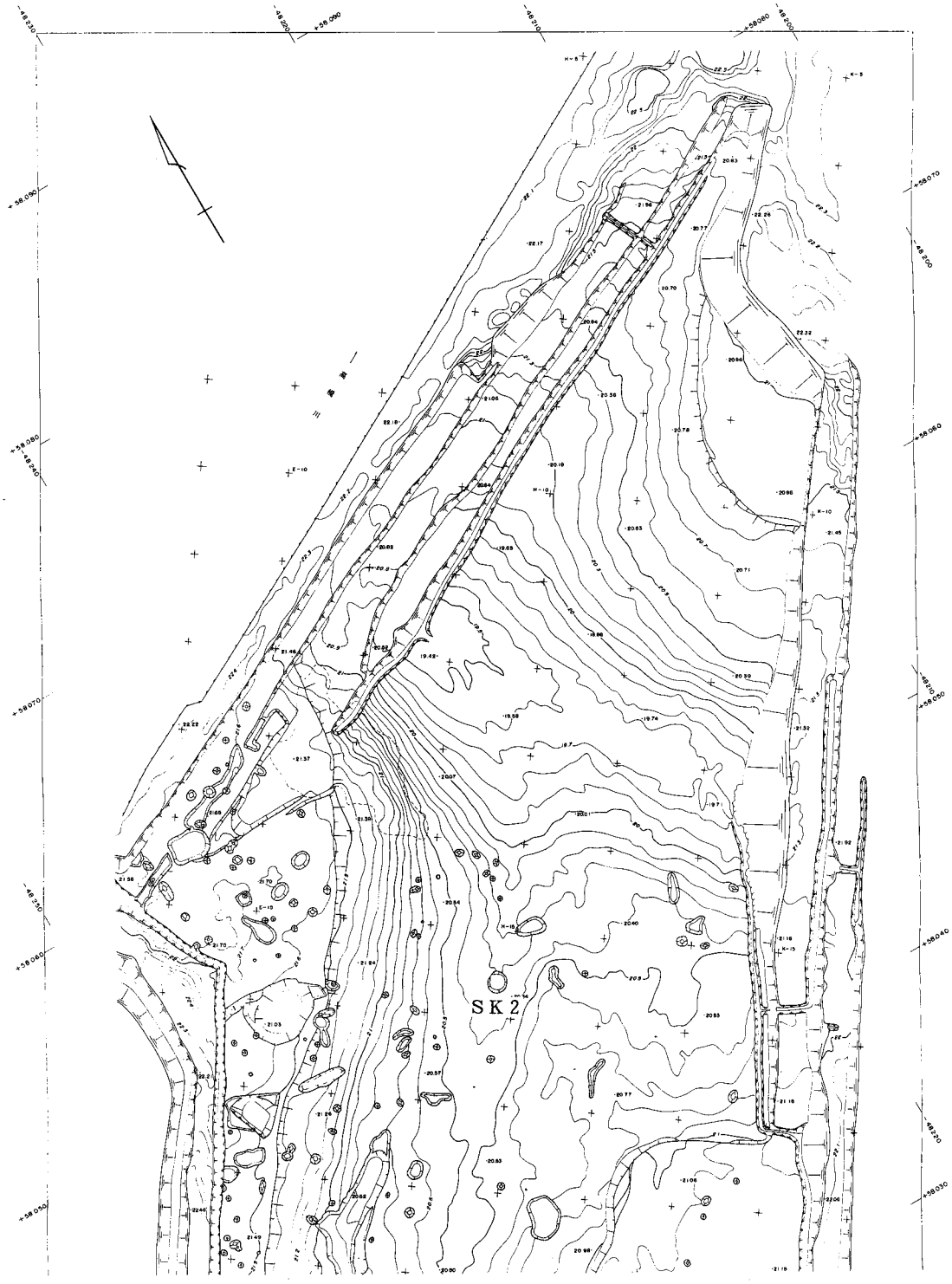
Ⅶ層（第5図12層）には縄文時代晩期の土器を含む。

Ⅶ層より下の地山層は、黄灰色の砂層であるが、所々その下の礫層が表れている。

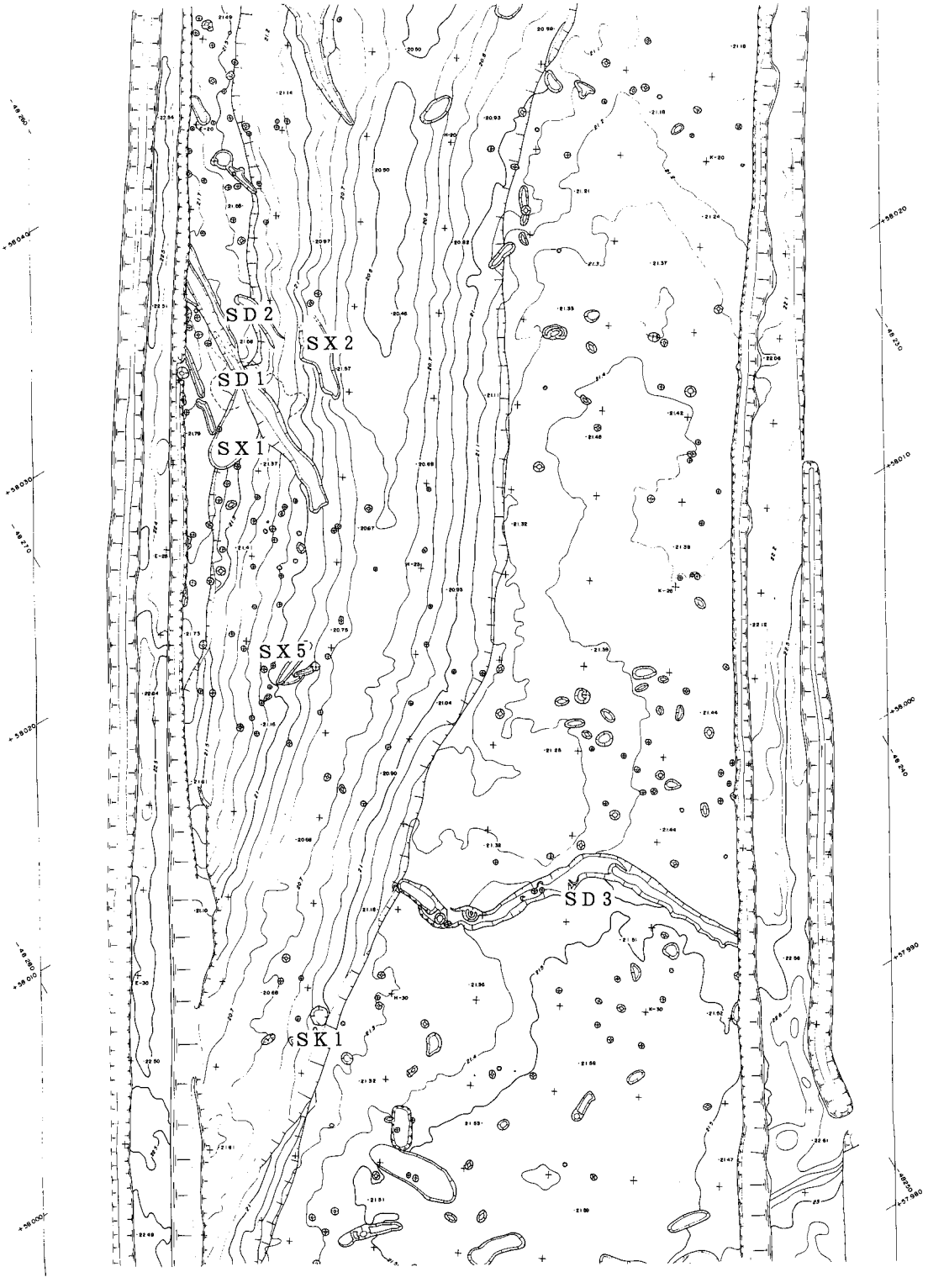


1，明黄褐色中砂
2，褐灰色細砂質シルト（現代のゴミ所々含む。）
3，青灰色細砂質シルト
4，明青灰色細砂質シルト
5，灰色極細砂質シルト（軟石細粒含む。Ⅰ層、床土。）
6，暗灰色極細砂質シルト
7，灰色極細砂質シルト（Ⅱ層、中世包含層。）
8，暗灰色極細砂質シルト（Ⅲ層、古代～中世包含層。）
9，濁暗オリーブ灰色シルト（Ⅳ層、古代包含層。）
10，黒色シルト（Ⅴ層、弥生末包含層。）
11，濁暗オリーブ灰色シルト（Ⅵ層。）
12，暗灰色シルト（Ⅶ層、縄文晩期包含層。）

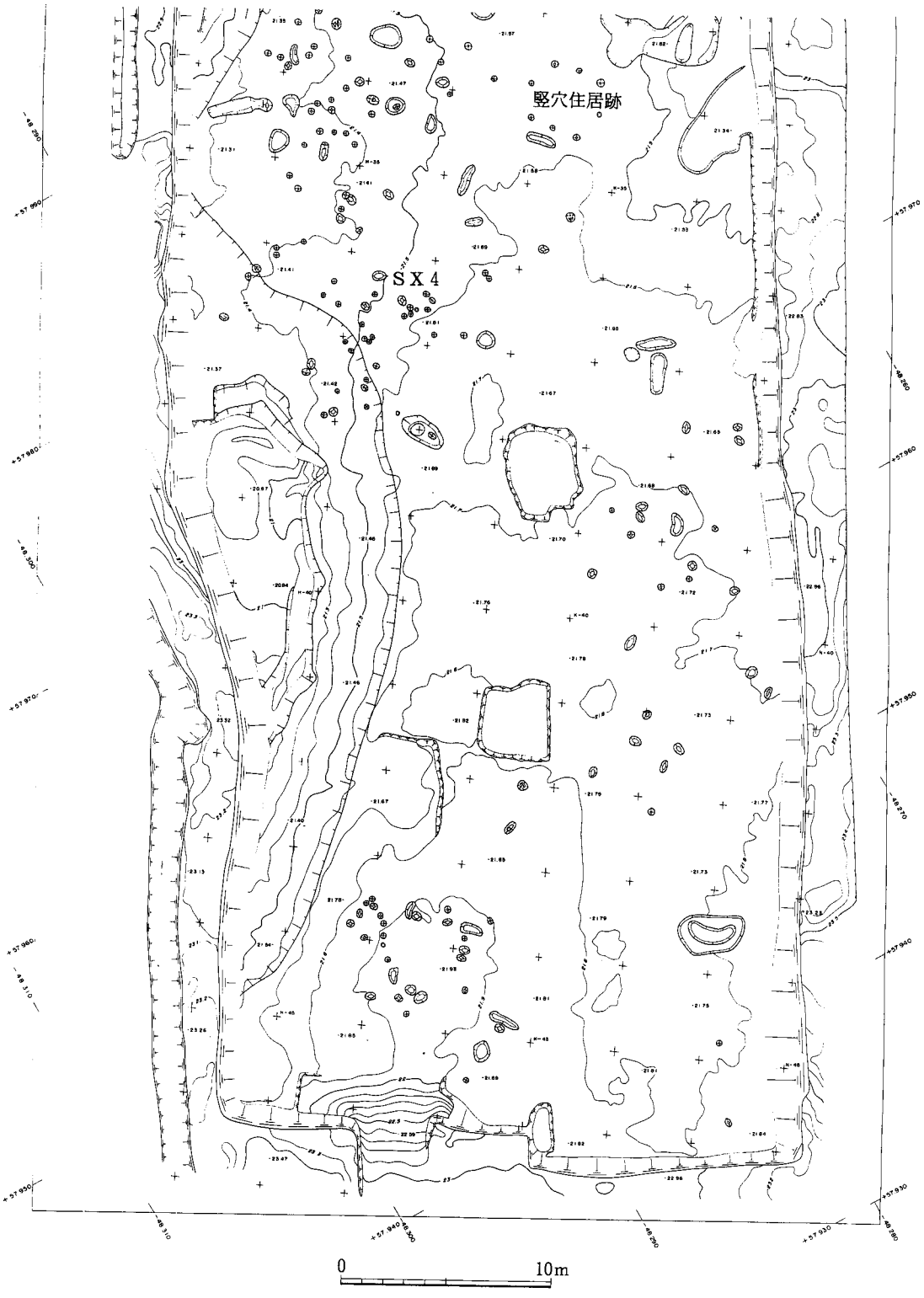
第５図　第二次調査区東壁土層断面図（S＝１／60，L＝23.5m）



第６－１図　第一次調査区平面図（S＝1／300，その１）

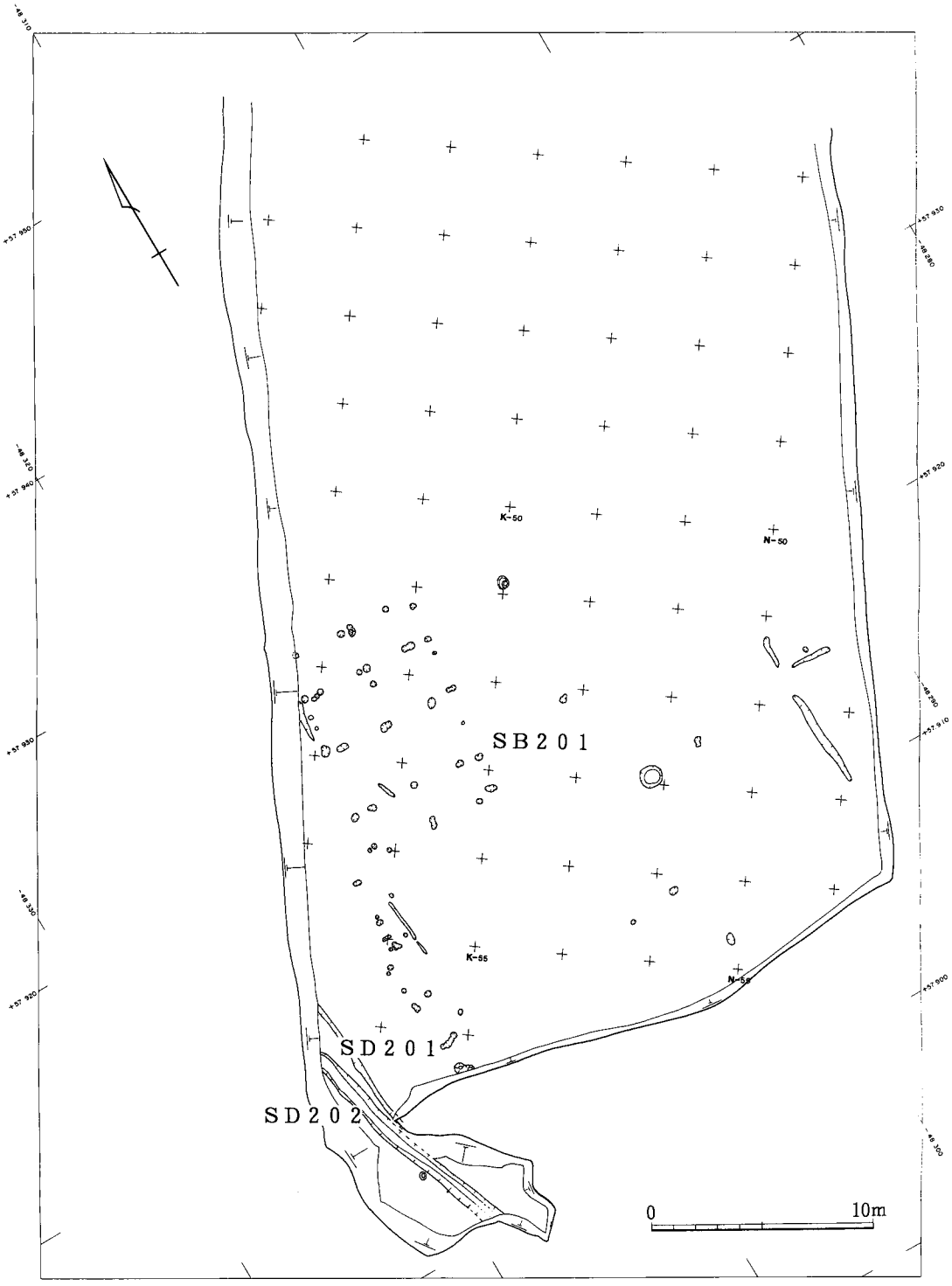


第６－２図　第一次調査区平面図（S＝１／300，その２）



第６－３図　第一次調査区平面図（S＝１／300，その３）

第７図　第二次調査区平面図（S＝１／300）



第８図　第二次調査区Ⅴ層上面平面図（S＝1／300）

第３節　第一次調査の遺構

自然河道

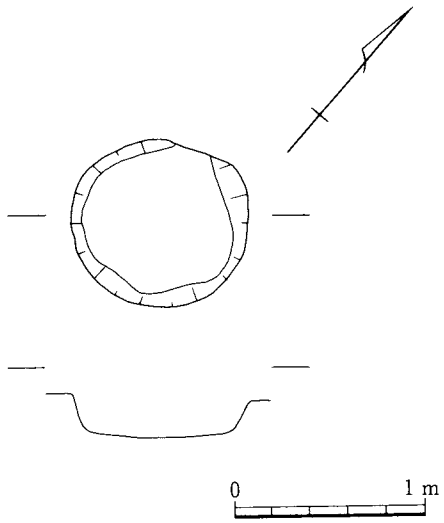
縄文時代晩期の自然河道の跡が検出された。幅15m、深さ２m余りの本流と幅10m、深さ１m前後の支流があり、その合流部も検出した。本流は調査区の北端を南から北に、支流は調査区のほぼ全域で南西から北東方向に蛇行しながら流れていたのを確認している。川底及び川の畔では縄文時代晩期の土器片（第16図９、13)、打製石斧などが出土している。しかしながら、多くの部分を重機で掘り下げたため、全ての遺物を採集できたわけではない。

自然河道内遺構

自然河道底面で遺構を確認している。特にＳＫ２土坑（第９図）は、河道底面を掘り込んでおり、第16図５の土器片が出土している。河道底に土坑があることは想定しておらず排水溝を掘削したときに確認した。河道の水が時として途切れたのか、もしくは流水中で何らかの作業を行っていたためにこの土坑が作られたのであろう。

ＳＸ４（第13図）

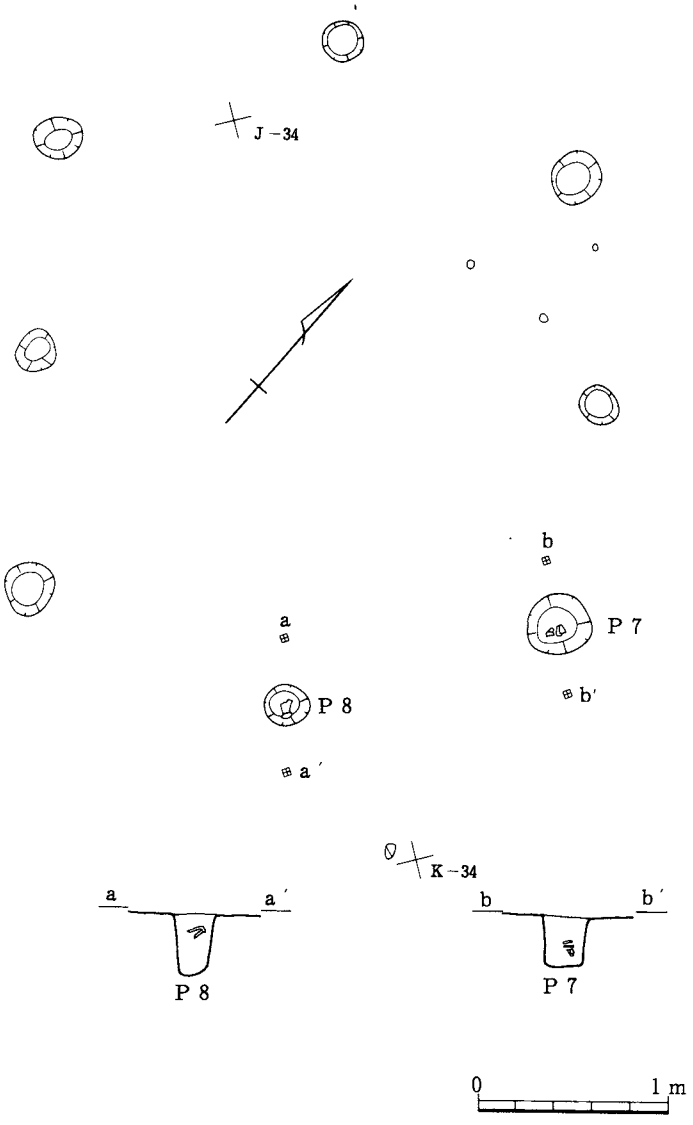
H-37区周辺、自然河道の畔の平坦面で打製石斧や縄文時代晩期の土器がまとまって出土している。（なお、第13図の番号は第22、23図の番号と一致する。）打製石斧は完形品が多く、縄文時代晩期の深鉢と共にほぼ同一のレベルから出土している。中には台石状の石もあり、それを中心として遺物が散布している。自然河道支流が大きく蛇行している内側の平坦地を何らかの作業場として利用していたと思われる。



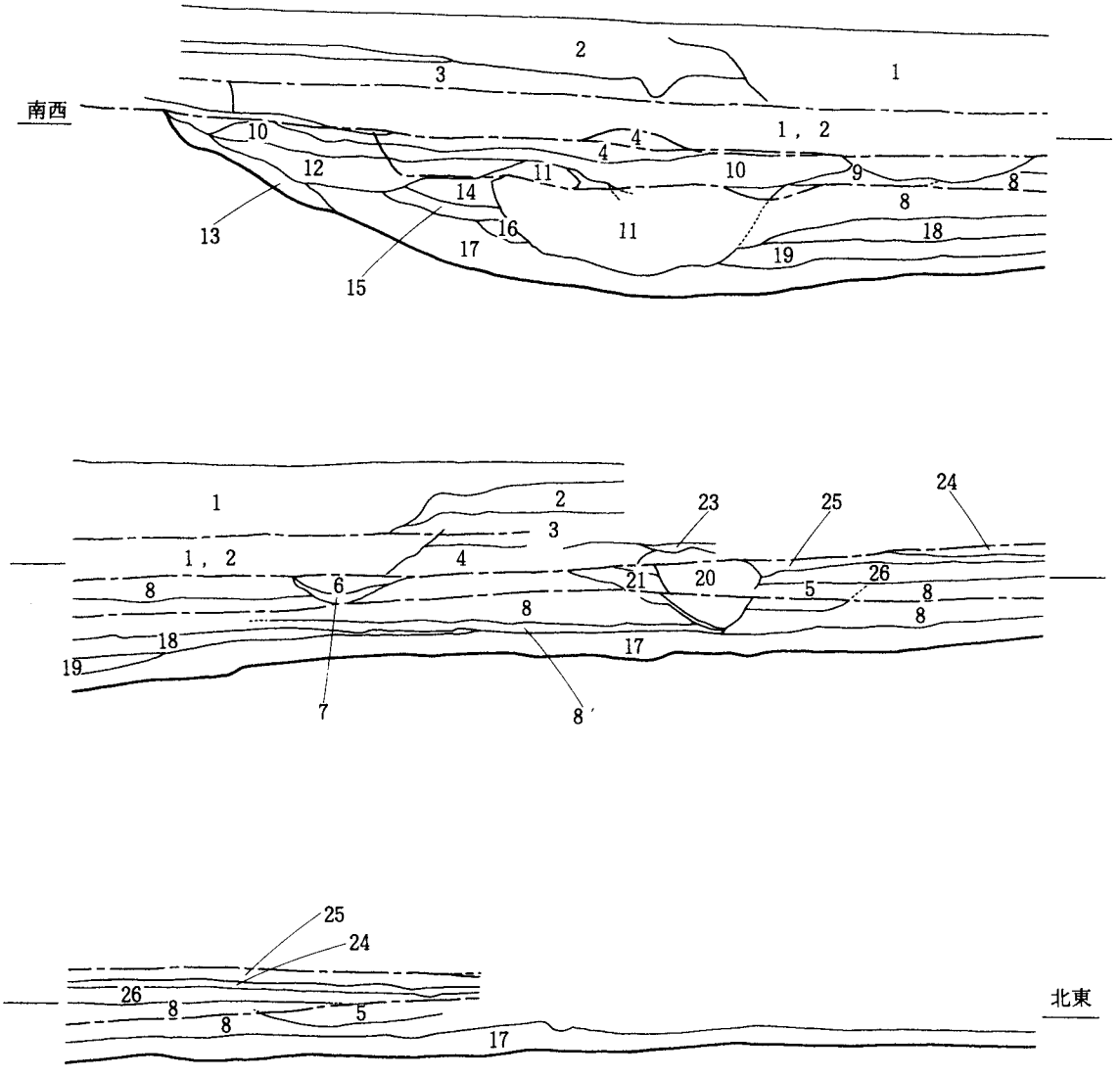
第９図　ＳＫ２実測図（Ｓ＝１／40，Ｌ＝20.5m）

竪穴住居跡（第10図）

K-33、34区から竪穴と思われる住居跡が検出されている。第一次調査でのことであり、地盤が固い縄文時代晩期の地山面での柱穴のみの検出で、いわゆる竪穴は確認していない。棟持柱を持つ平地式の住居跡である可能性も残るが、ここでは竪穴住居跡として報告しておく。柱穴Ｐ７、Ｐ８からは弥生時代後期後半（法仏式）の土器片（第18図46、47）が出土している。

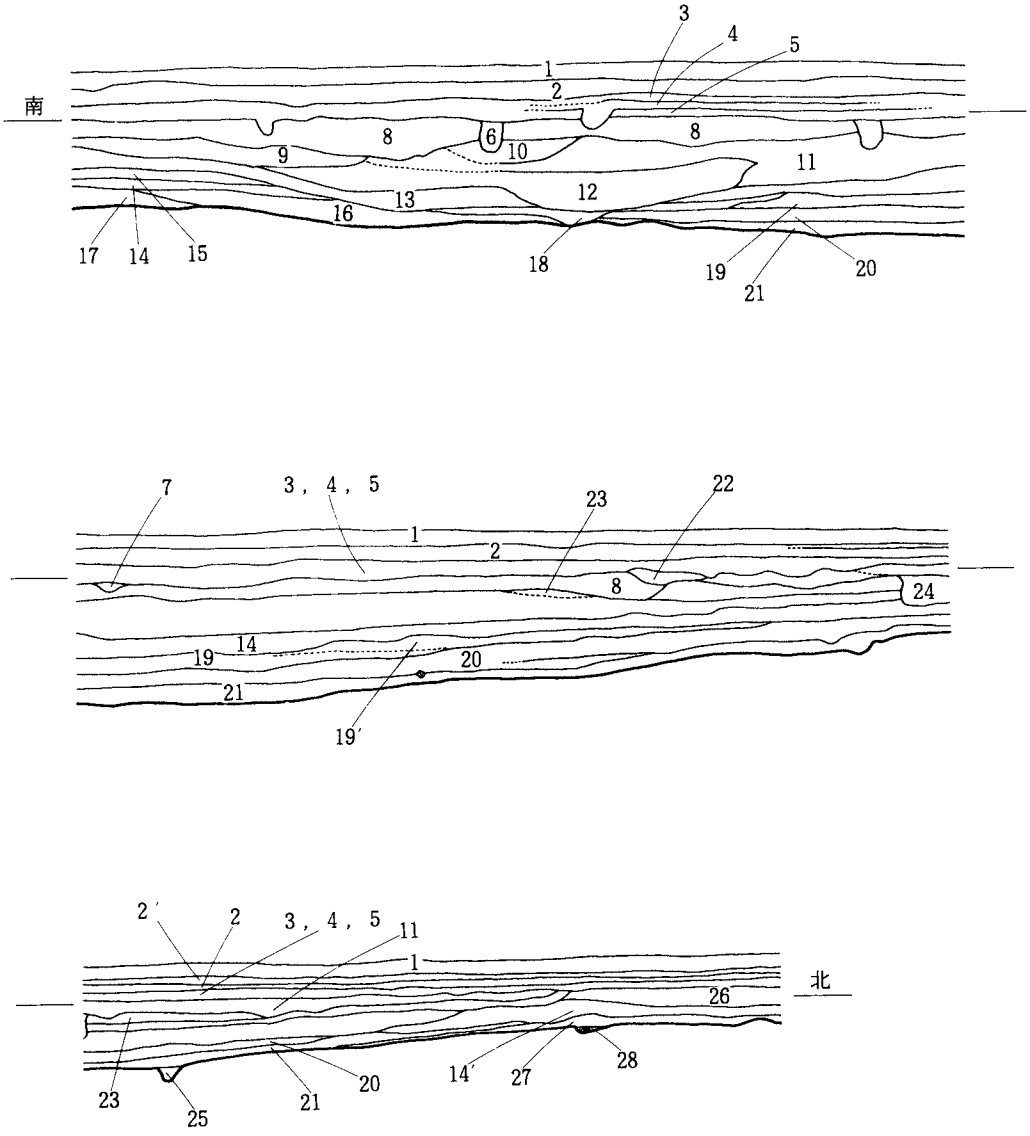


第10図　竪穴住居跡実測図（S＝1／40，L＝21.5m）



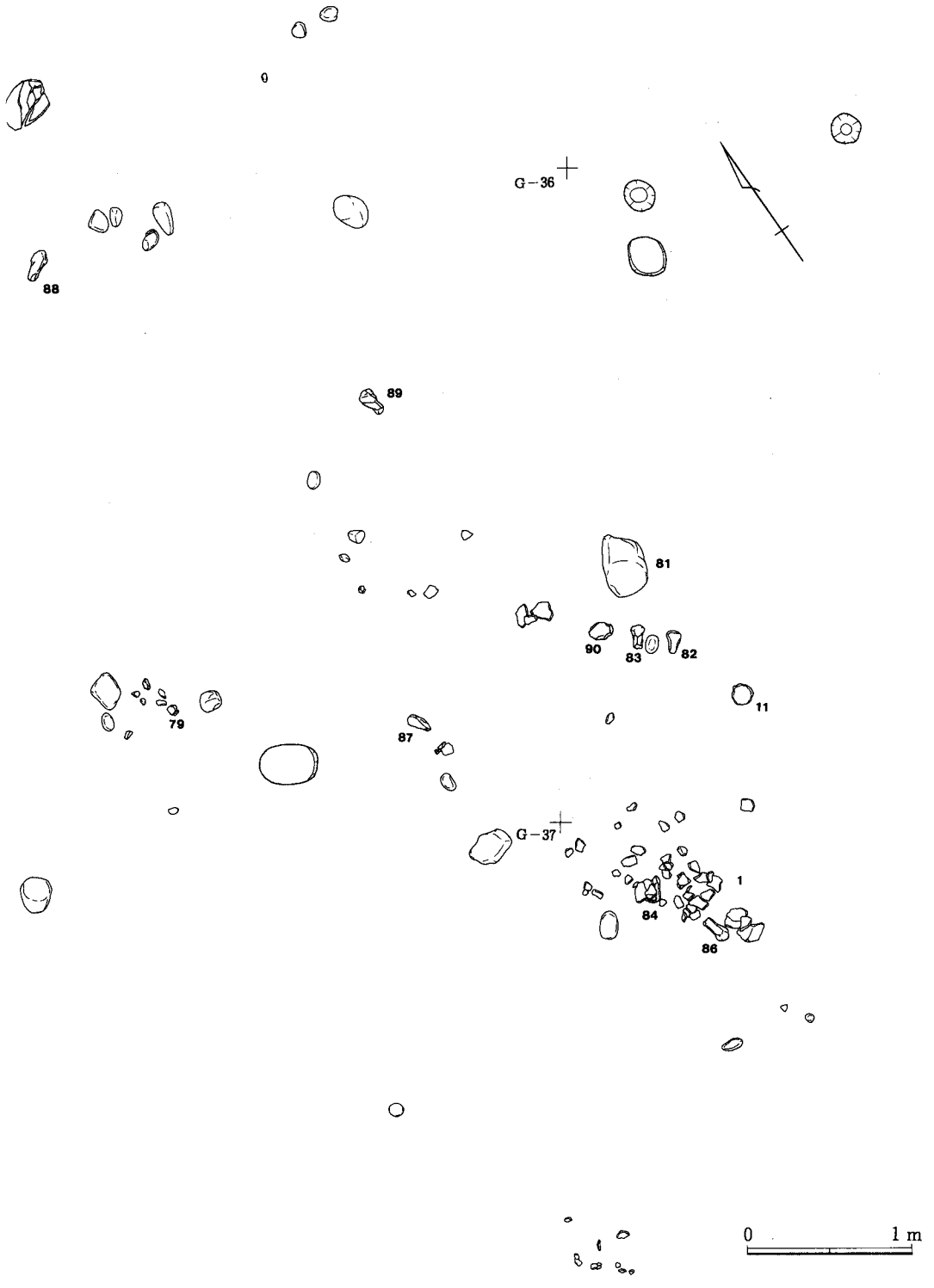
1，攪乱層
2，淡黄褐色砂質シルト（攪乱層か）
3，黒褐色砂質シルト
4，明乳灰色極細砂質シルト
4，（乳）灰色極細砂質シルト
5，明灰色シルト質粗～細砂層
6，暗黒褐色シルト
7，灰色粗砂～中砂混じりシルト
8，明（黄）乳灰色シルト質極細砂
8，暗乳灰色シルト
9，赤褐色粗砂
10，褐灰色シルト質砂層
11，灰褐色粗砂層
12，灰色極細砂、褐灰色粗砂の互層
13，黄灰色極細砂混じり淡黒褐色シルト
14，濁（黄）灰色シルト質極細砂
15，明黄色シルト
16，（暗）灰色細砂
17，黒褐色シルト
18，明黄灰色細砂（灰色砂互層に混入）
19，青灰色細砂質シルト
20，褐灰色砂礫層
21，暗灰色砂質シルト
22，（褐）灰色砂質シルト
23，暗灰色シルト質中～細砂
24，黒褐色砂質シルト
25，（暗乳）灰色砂質シルト
26，黒褐色砂質シルト

第11図　自然河道本流土層断面図（S＝1／80，L＝20.1m）



1，乳灰色シルト質極細砂（やや明るい灰色。）
2，（暗）乳灰色シルト質極細砂（褐色味帯びる。粗～中砂含む。）
3，灰色極細砂質シルト（1，2より暗い。斑状。）
4，暗灰色極細砂質シルト（3より暗い。）
5，灰色極細砂質シルト
6，暗褐灰色極細砂質シルト
7，黄灰色極細砂ブロック小塊混じり暗灰色シルト（炭含む。）
8，黒褐色シルト（粗～中砂含む。）
8，黒褐色シルト（やや淡く、粗砂多く含む。）
8，黒褐色シルト（8より淡く、暗灰～黄褐色シルトへ漸移する層。）
9，暗灰色シルト混じり濁黄灰色細砂
10，灰色極細砂質シルト（粗砂～礫多く含む。）
11，黄褐色礫～粗砂
12，黄褐色粗～中砂
13，暗灰色シルト少量混じり灰色シルト質極細砂
14，黒褐色シルト（8に比べシルト質強い。）
15，暗灰色シルト混じり灰色極細砂質シルト
16，暗灰色シルト質極細砂（15より暗い。）
17，（暗）灰色シルト質極細砂（15より暗く、16より明るい。）
18，灰色砂礫層（5㎜～数㎝の軟石の円礫及び粗～細砂。）
19，乳灰色シルト（軟石、粗砂含む。）
19，乳灰色シルト（軟石含む。）
20，淡黒褐色シルト質細砂
21，淡黒褐色シルト質細砂（20より砂質。）
22，濁乳灰色極細砂質シルト
23，褐灰色シルト質粗砂（～細砂）
24，暗灰シルト（炭多い。）
25，地山多量混入灰色シルト

第12図　西壁自然河道本流土層断面図（S＝1／80，L＝22.0m）



第13図　ＳＸ４実測図（Ｓ＝１／80）

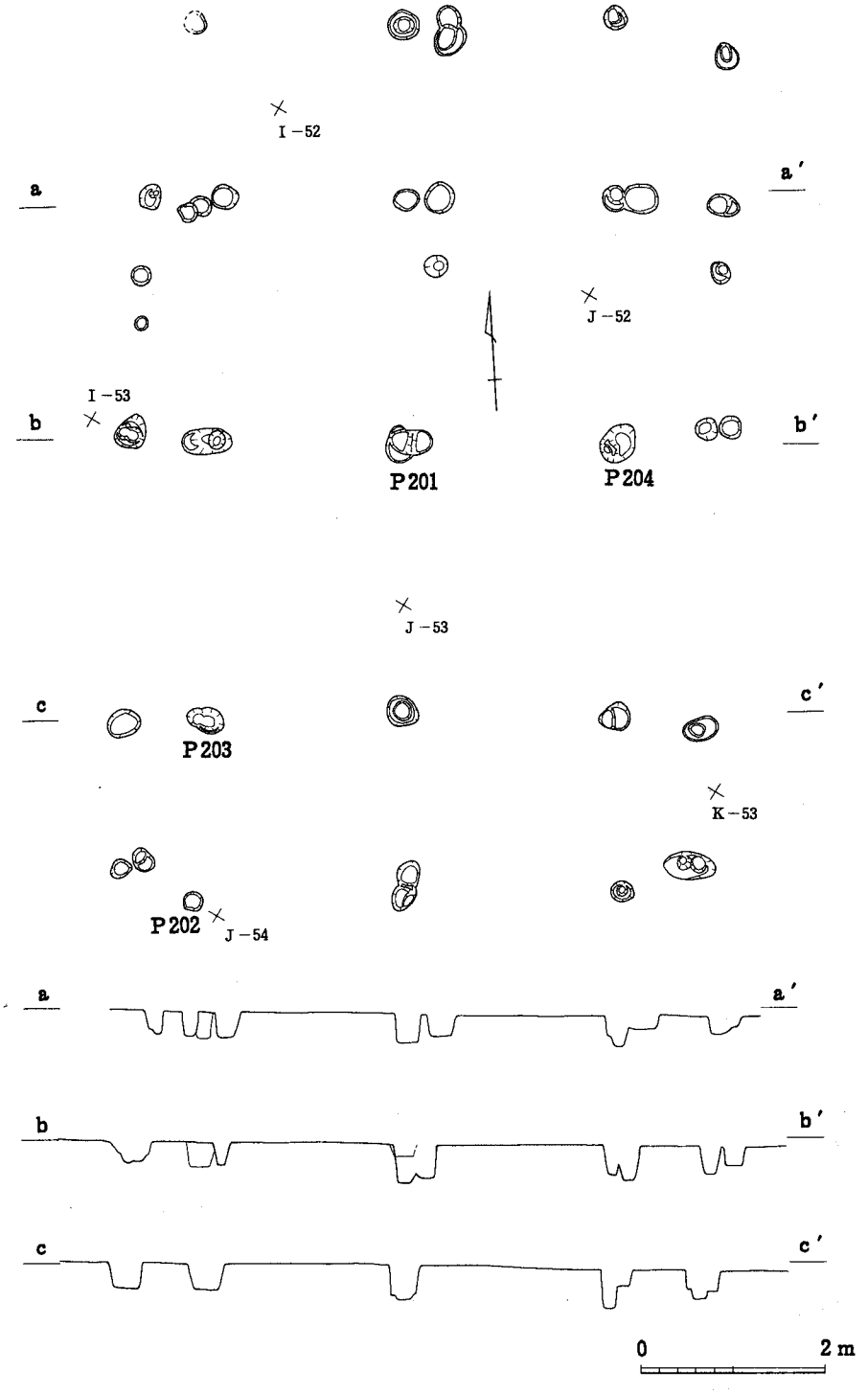
第４節　第二次調査の遺構

掘立柱建物跡（ＳＢ２０１、第14図）

I-51、K-51、L-53、J-54区内に納まる掘立柱建物跡（ＳＢ201）は、主軸をほぼ北に採った四面庇付きの総柱建物跡である。桁行き２間（ 5.7m）×梁行き２間（4.65m）、床面積は約26㎡であるが、それぞれ庇まで含めると桁行き 9.7m、梁行き 6.3m、床面積約61㎡となる。柱穴掘り方は円形を呈し小規模であり、最大のもので直径32cm、深さ38cmである。また、柱穴掘り方の多くが２つ以上切り合って存在することから立て替えを行っているものと思われる。柱穴P201からは10世紀前後の内面黒色土師器碗底部（第25図92）が出土している。P202、P203からは土師器破片、P204からは木片が出土している。

溝（ＳＤ２０１、２０２）

ＳＢ２０１の主軸と平行するようにほぼ南北方向に延びる溝を検出した。埋土は黄色中砂で時期は出土土師器から平安時代中・後期と推定される。当時、遺跡周辺に条里制が施行されていたことが推定される。



第14図　ＳＢ201実測図（Ｓ＝１／80，Ｌ＝22.4m）

第4章　遺　物

第1節　第一次調査出土遺物

(1)　縄文時代晩期の出土遺物

自然河道出土遺物（第16図５、９、13、第20図57～61、第21図62～71）

縄文時代晩期の土器

河道底及び埋土からは縄文晩期の土器が出土しているが、磨耗が激しく多くは小片である。

９は合流部の底からの出土である。外面に縄文が見られる。晩期の深鉢の体部と思われる。13は支流の岸近くから出土している。深鉢の底部と思われるが、磨耗が激しく調整などは不明である。

打製石斧

59、71は合流部の底から、58、61、62、65、67、69は支流底から出土している。60、66、68、70は支流の川岸から、63は支流埋土からの出土である。打製石斧の未製品であると思われる57は支流底からの出土である。

自然河道内溝出土遺物（第22図74）

74は自然河道内の溝（Ｇ－18区）から出土した打製石斧である。

自然河道内土坑出土遺物（第16図５）

５は支流底の土坑（ＳＫ２）から出土した縄文時代晩期の深鉢である。口径は15cmを測り、外面には条痕がみられる。

溝出土遺物（第22図72、73）

72、73は自然河道東側の溝（ＳＤ３）から出土した打製石斧である。

ＳＸ４出土遺物（第15図１、第16図11、第22図79～81、第23図82～90）

１は縄文時代晩期前葉（中屋式）の深鉢で、口径36cm、外面には条痕があり上部には黒斑が見られる。11は底径 9.6cmを測る縄文時代晩期の深鉢の底部である。底面は調整が為されており、網代などの痕は見られない。

79、80、82～90はＳＸ４から出土した打製石斧である。

その他の遺構出土遺物（第22図75～77）

75はＳＸ１、76はＳＸ５、77はＳＸ６から出土した打製石斧である。

包含層出土遺物（第15図２～４、第16図６～８、10、12、14、15、第22図78、第24図91）

２は縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての深鉢である。外面に縄文が見られる。３、４は口縁部で外面に縄文がみられる。６の底面には網代と思われる痕跡が認められる。12、15の底面にも網代状の痕跡が見られる。いずれも縄文時代晩期の深鉢と思われる。

78は打製石斧である。91は凹み石として使われた後熱を受けたと思われ、表面が黒く変色している。一つの面だけ変色していないことから、熱を受けた後、その面を使いすり石として使用したようである。石材は砂岩で、長さ11.9㎝、幅8.9 ㎝、厚さ5.5 ㎝、重量851.7 ｇを測る。

(2)　弥生時代以降の出土遺物

竪穴住居跡柱穴出土遺物（第18図46、47）

46は竪穴住居跡柱穴Ｐ８出土の高坏の脚部である。外面はミガキ調整が為されており、脚部上方に串状具によるキザミ模様が巡らされている。47はＰ７からの出土である。いずれも弥生時代後期後半の法仏式の土器である。

溝出土遺物（第17図16、17、18、第18図36、39）

ＳＤ１

16、17、18は珠洲焼である。16、17は甕の肩部で、17には耳の跡が残る。18は甕の口縁である。

36は法仏式の壺である。底径６㎝を測る。

ＳＤ２

39は法仏式の甕の口縁部である。口縁外面には擬凹線が見られる。口径は21.6㎝を測る。

土坑出土遺物（第17図19）

ＳＫ４

19は土師質の土器であるが、内外面とも剝離、磨耗が著しく調整等は不明である。底径7.6 ㎝を測る。

その他の遺構出土遺物（第18図37、38、40～45）

ＳＸ１

45は底部であるが磨耗が著しく詳細は不明である。法仏式の甕と思われる。

ＳＸ２

37は壺の頸部、38、40、41は甕の口縁部、42、43は高坏の坏、44は壺の底部である。いずれも法仏式の土器である。

包含層出土遺物（第17図20～35、第18図48、第19図49～54、第20図55、56）

48は法仏式の高坏の脚部である。

20～26は須恵器である。20は坏の底部で底径7.6cmを測る。21、22は蓋で、21はつまみの部分である。23は有台坏である。24は高台付きの壺の底部で底径10.1cmを測る。25、26は甕である。20、21、24が河北郡の高松産、22、23が金沢市の末産、25が小松産である。

27、28、32は瀬戸・美濃の陶器である。27は平碗の底、釉は灰釉で底径4.7 cmを測る。目跡が4ヶ所確認され、目跡には漆と思われる付着物がある。28はおろし皿で底径は7.4 cmを測る。32は緑釉小皿で口径は10.9cmを測る。

29は青磁碗の底部で底径5.7 cmを測る。14世紀後半以降に輸入されたと思われる。

30、31は肥前の陶磁器である。30は陶胎染付で底径5.4 cmを測る。31は染付碗の口縁部で外面にコンニャク印判による染付が為されている。

33～35、51は珠洲焼である。33～35は壺、51は擂り鉢である。

49は越前焼の擂り鉢、50は湯の上谷で焼かれた加賀焼の甕の体部である。

52は近世の植木鉢か。

53、54はふいごの羽口である。

55は下駄、56は用途不明の木製品である。

第2節　第二次調査出土遺物

(1)　縄文時代晩期の出土遺物

包含層出土遺物（第27図128 、130 、131 ）

128は打製石斧、 130、 131はすり石である。 130の石材は安山岩で、長さ10.7cm、幅 7.2cm、厚さ 7.1cm、重量 903.0ｇを測る。 131の石材は砂岩で、長さ 9.4cm、幅 9.2cm、厚さ 6.2cm、重量 711.3ｇを測る。

(2)　弥生時代以降の出土遺物

掘立柱建物跡（ＳＢ２０１）出土遺物（第25図92、第27図 129）

92は内面黒色処理された土師器碗の底部である。10世紀前後のものと思われるが小片であり詳細は不明である。Ｐ２０１より出土している。

129はＰ２０２から出土した石で、すり跡がかすかに見られる。石材は砂岩で、長さ11.2cm、幅10.2cm、厚さ 7.8cm、重量1037.9ｇを測る。

土坑出土遺物（第25図93）

ＳＫ２０１

93は須恵器碗である。口径は13cmを測る。小松産の可能性が高い。

包含層出土遺物（第25図94～118 、第26図119 ～127 ）

99のみⅢ層出土で他はⅠ層あるいはⅡ層からの出土である。（第５図参照）

94は灰釉の瓶の頸部から口縁部にかけてのものであるが、熱を受けたためか釉が灰色になり、はげ落ちている。

95は口径18cmの須恵器蓋で、内外面ともにロクロナデである。端部に重ね焼きの痕跡が見られる。96は口径18.3cmの須恵器坏で、内外面ともにロクロナデである。どちらも小片で産地は不明である。

97は土師質土器で煮沸具である長甕の口縁である。口縁端部の面取り部分を強くつまみ上げている。

98は手づくねのかわらけで形状は楕円形である。口縁端部に燈心油痕が見られる。燈明皿として使われたものと思われる。

99～102 、104 ～106 は青磁の碗、103 は青磁の皿である。99、100 はヘラ状具により連弁文が刻まれている。105 は底部で、高台径7.2 cm外底面、内底面共に釉が削られている。

117 は15世紀前後の白磁皿で高台はえぐり高台、見込み内には焼成時の重ね焼の痕が残る。高台内に墨書と黒漆によると思われる字がある。

107 ～112 、114 は瀬戸・美濃の陶器である。107 は天目茶碗で鉄釉が掛かり、口径は12.8cmを測る。108 、109 、110 は平碗、111 、112 はおろし皿、114 は皿である。いずれも釉は灰釉である。

113 は越中瀬戸の皿である。鉄釉を縁掛けしている。

115 は唐津の皿で見込みには胎土目が４ヶ所残る。116 は唐津の碗である。118 は肥前の染付で18世紀初頭のものである。

119 は越前焼の擂り鉢である。口縁部は端部引き出しの際の凹線が見られ内面には櫛歯状具で内底面へ深い施文がされている。

120 、121 、122 、123 は珠洲焼の擂り鉢である。

124 、125 、126 は砥石、127 は硯である。124 は凝灰岩質の中砥石で、いわゆる鎌砥と呼ばれるものである。近世から近代にかけての九州の備水砥の可能性が高い。125 は京都の鳴滝産の仕上げ砥石である。125 と同時期のものと思われる。126 も鳴滝の仕上げ砥石であるが、中世のものである。127 は赤間石の硯で中世から近世にかけてのものである。

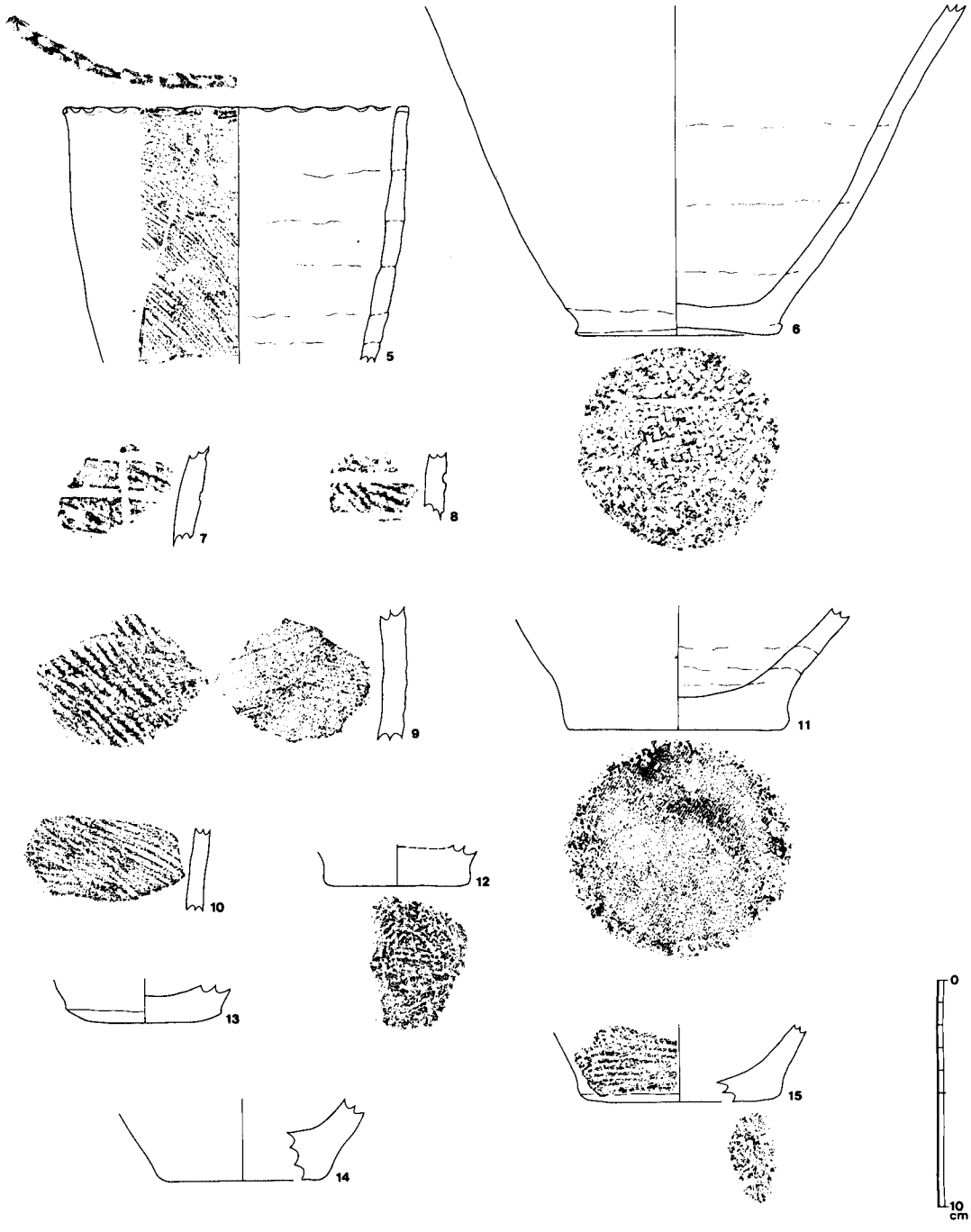
第１表　打製石斧観察表

図No.	出　土　地　点	実測No.	石　　材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
20－57	Ｇ－22区支流下層	37	流紋岩	15.0	12.1	4.5	962.0
20－58	Ｊ－25区河道底	19	砂岩	21.5	8.3	3.8	682.7
20－59	Ｊ－15区合流部底	32	安山岩	14.3	6.1	2.8	262.0
20－60	拡張区西河道肩	48	石英粗面岩	13.2	6.6	2.3	243.6
20－61	Ｈ－21区支流底	36	安山岩	12.3	7.3	2.0	160.0
21－62	Ｇ－31区河道底	43	ひん岩	16.9	8.6	2.3	397.8
21－63	Ｇ－22区支流上層	41	流紋岩	(7.1)	(5.5)	(2.3)	(123.2)
21－64	Ｇ－22区支流礫層	44	安山岩	(11.2)	8.1	(2.7)	(290.3)
21－65	Ｇ－15区支流底	39	安山岩	(7.1)	(6.7)	(2.6)	(135.9)
21－66	Ｉ－42区支流肩	34	安山岩	(11.1)	7.9	(3.0)	(259.0)
21－67	Ｈ－20区支流底	31	安山岩	(11.1)	(7.5)	(1.7)	(197.3)
21－68	Ｈ－44区支流肩	35	安山岩	(12.7)	(8.0)	(3.5)	(352.8)
21－69	Ｇ－22区支流下層	38	安山岩	(10.7)	8.3	(1.2)	(103.5)
21－70	Ｇ－22区支流下層	42	安山岩	(8.0)	8.3	(2.3)	(208.6)
21－71	Ｈ－14区合流部底	33	片麻岩	10.7	5.7	2.7	189.4
22－72	Ｋ－28区ＳＤ３底	40	片麻岩	9.9	6.6	2.9	135.9
22－73	Ｋ－28区ＳＤ３	16	石英斑岩	(6.5)	10.2	(2.6)	(172.1)
22－74	Ｇ－18区支流内溝	49	石英粗面岩	(6.8)	8.2	(2.2)	(135.7)
22－75	Ｆ－23区ＳＸ１	27	片麻岩	(10.5)	(6.4)	(2.1)	(186.1)
22－76	Ｉ－24区ＳＸ５	45	火山礫凝灰岩	15.7	7.8	2.7	408.6
22－77	Ｉ－24区ＳＸ６	46	火山礫凝灰岩	11.8	6.6	1.6	127.0
22－78	包岩層	47	石英粗面岩	(7.9)	(7.5)	(2.6)	(142.2)
27－128	Ｏ－48区地山面	26	流紋岩	16.7	9.7	2.2	352.4

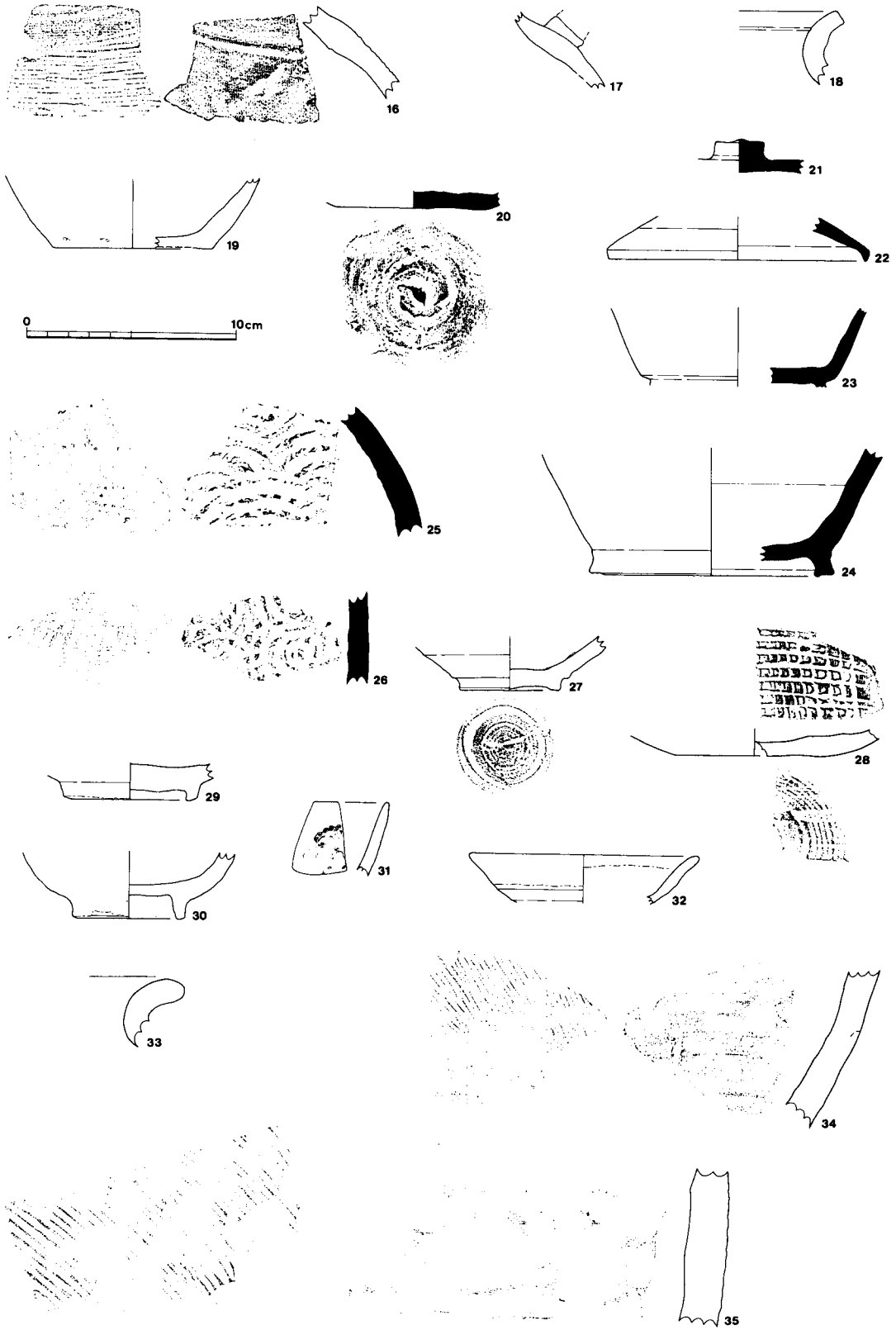
第２表　ＳＸ４出土打製石斧観察表

図No.	出　土　地　点	実測No.	石　　材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
22－79	Ｇ－36区No.24	25	火山礫凝灰岩	(6.9)	(5.3)	(2.2)	(92.6)
22－80	Ｈ－37区No.38	21	砂岩	(4.9)	(6.9)	(2.3)	(97.8)
23－82	Ｈ－36区No.19	28	石英粗面岩	14.0	8.4	2.8	320.1
23－83	Ｈ－36区No.17	23	安山岩	14.9	8.8	3.1	332.8
23－84	Ｈ－37区No.32	14	凝灰岩	15.2	7.8	3.0	302.1
23－85	Ｉ－36区	18	石英粗面岩	15.2	6.6	3.1	387.3
23－86	Ｈ－37区No.33	15	石英粗面岩	16.8	8.6	2.7	328.5
23－87	Ｇ－36区No.28	24	流紋岩	16.4	8.0	3.2	394.0
23－88	Ｇ－36区No. 2	30	石英粗面岩	19.0	10.5	3.0	559.8
23－89	Ｇ－36区No.11	29	凝灰岩	18.1	9.3	3.2	471.2
23－90	Ｈ－36区No.16	22	石英粗面岩	(14.2)	10.4	(2.5)	(386.9)

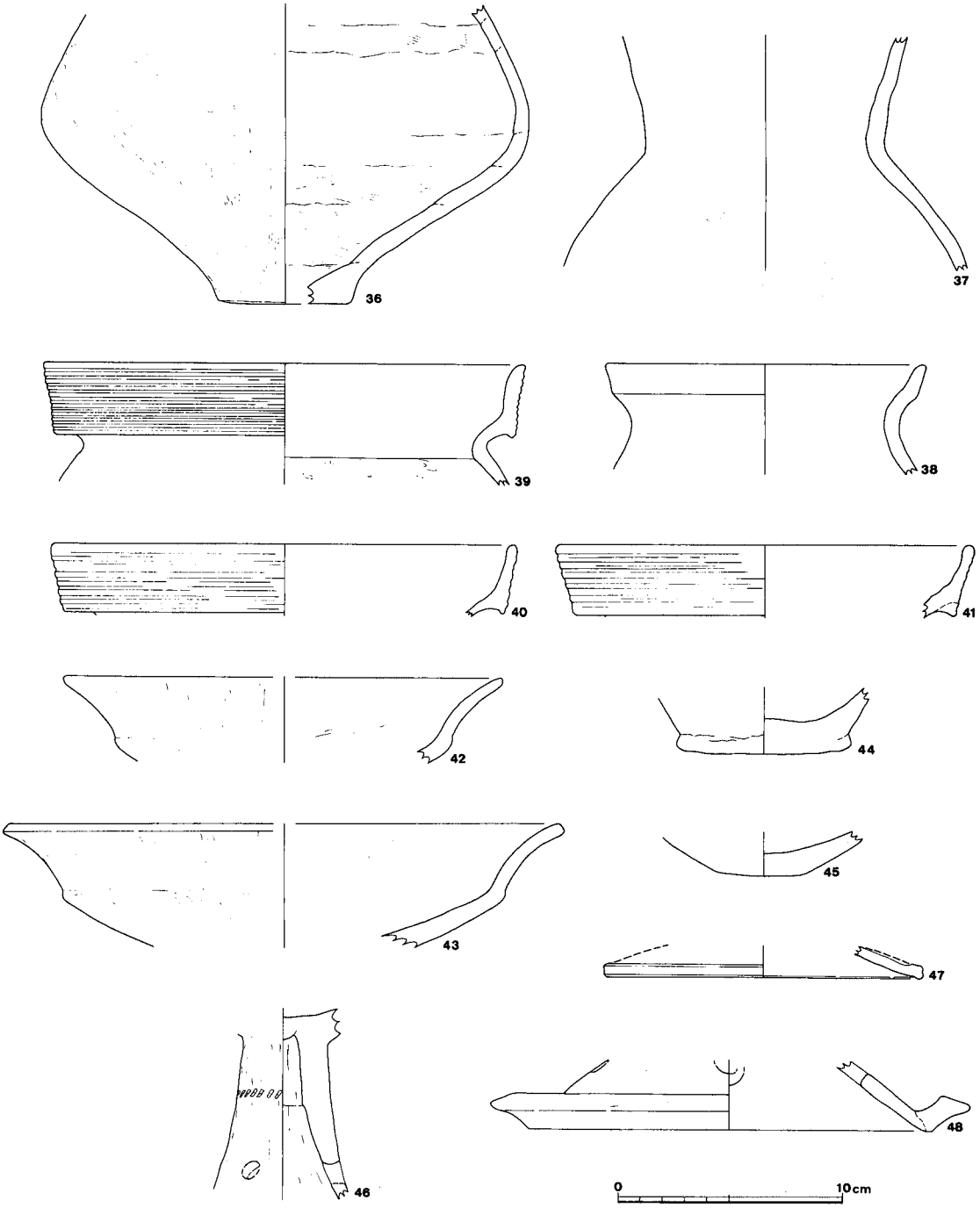
第15図　第一次調査出土遺物



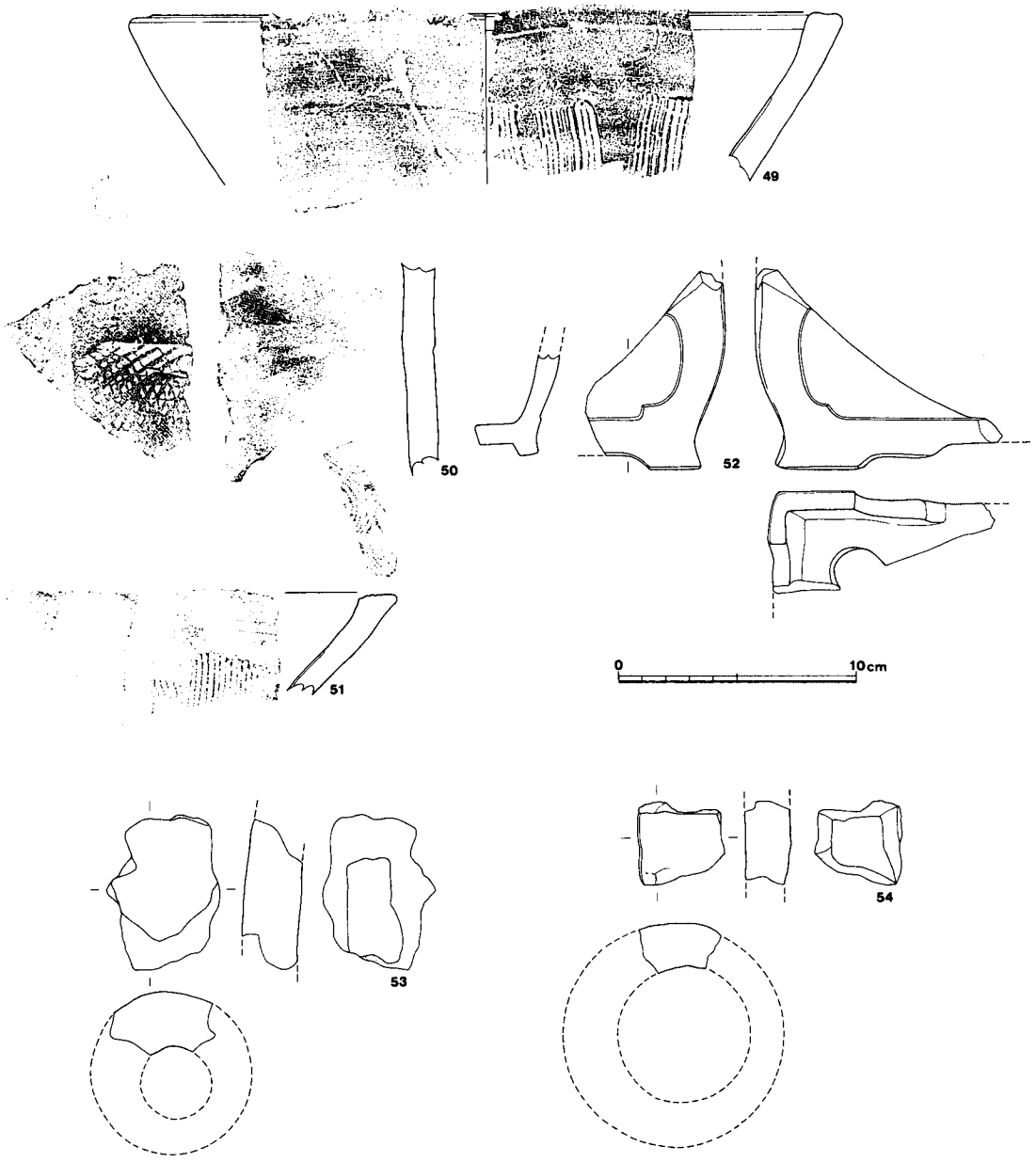
第16図　第一次調査出土遺物



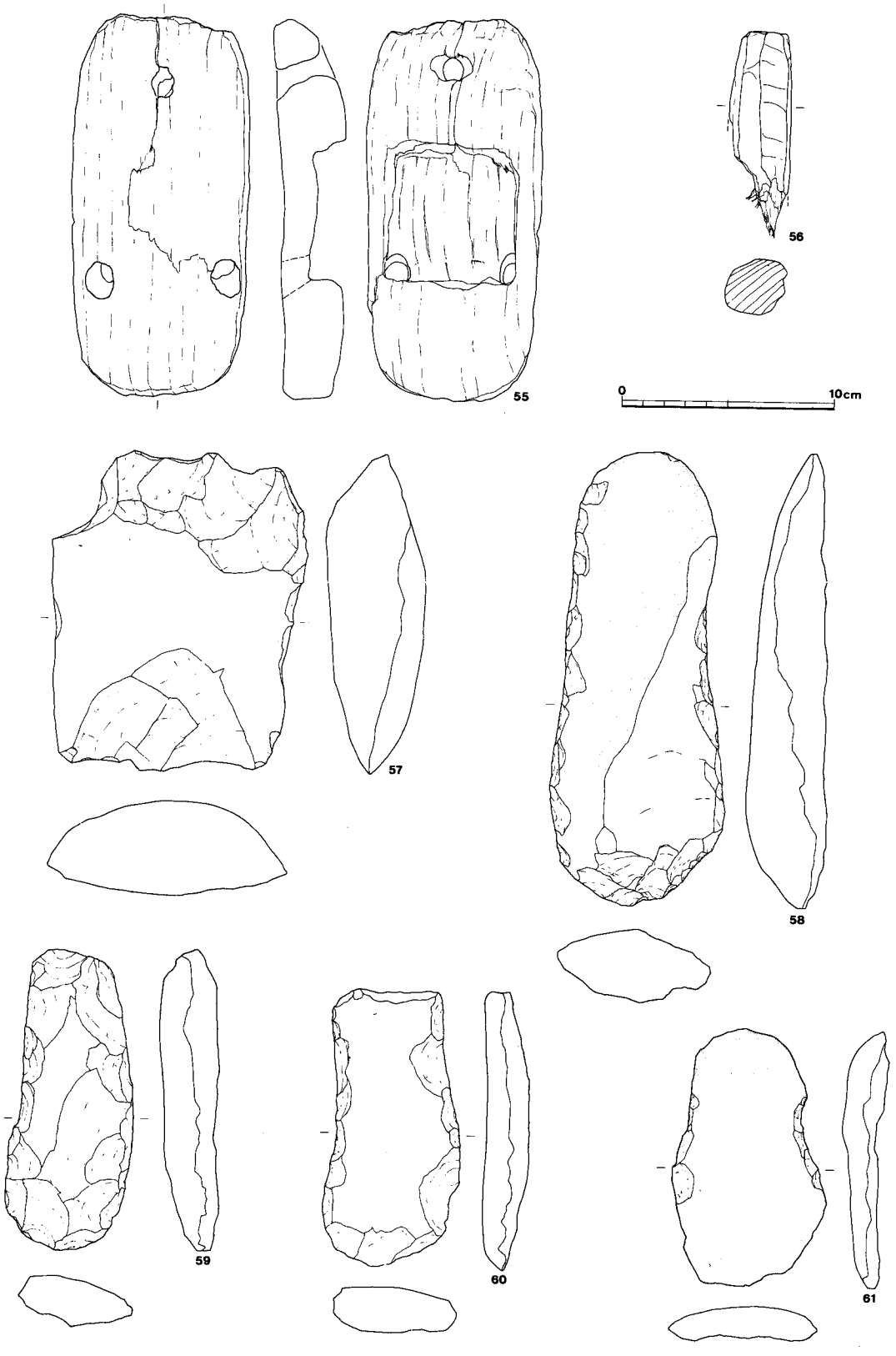
第17図　第一次調査出土遺物



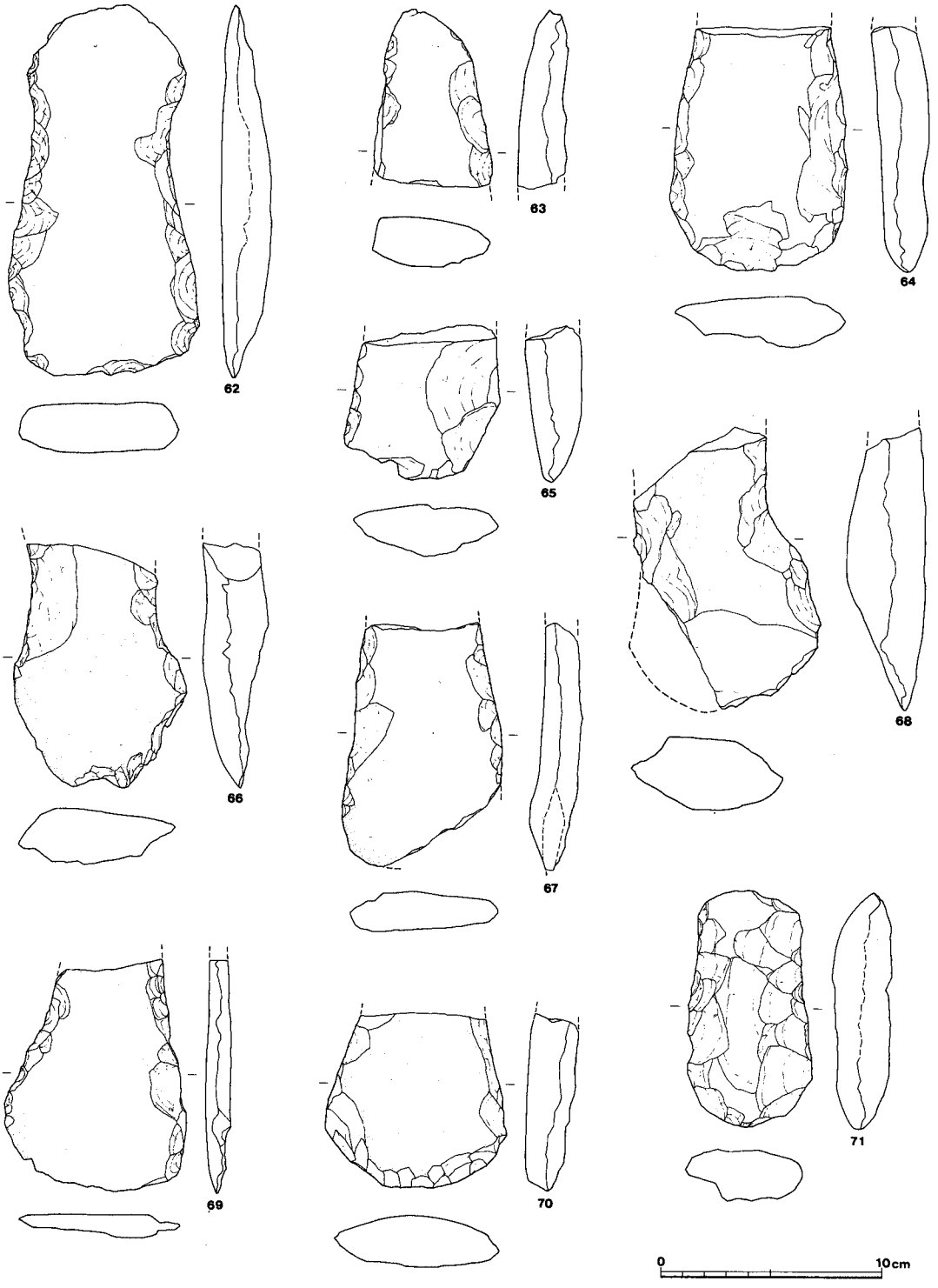
第18図　第一次調査出土遺物



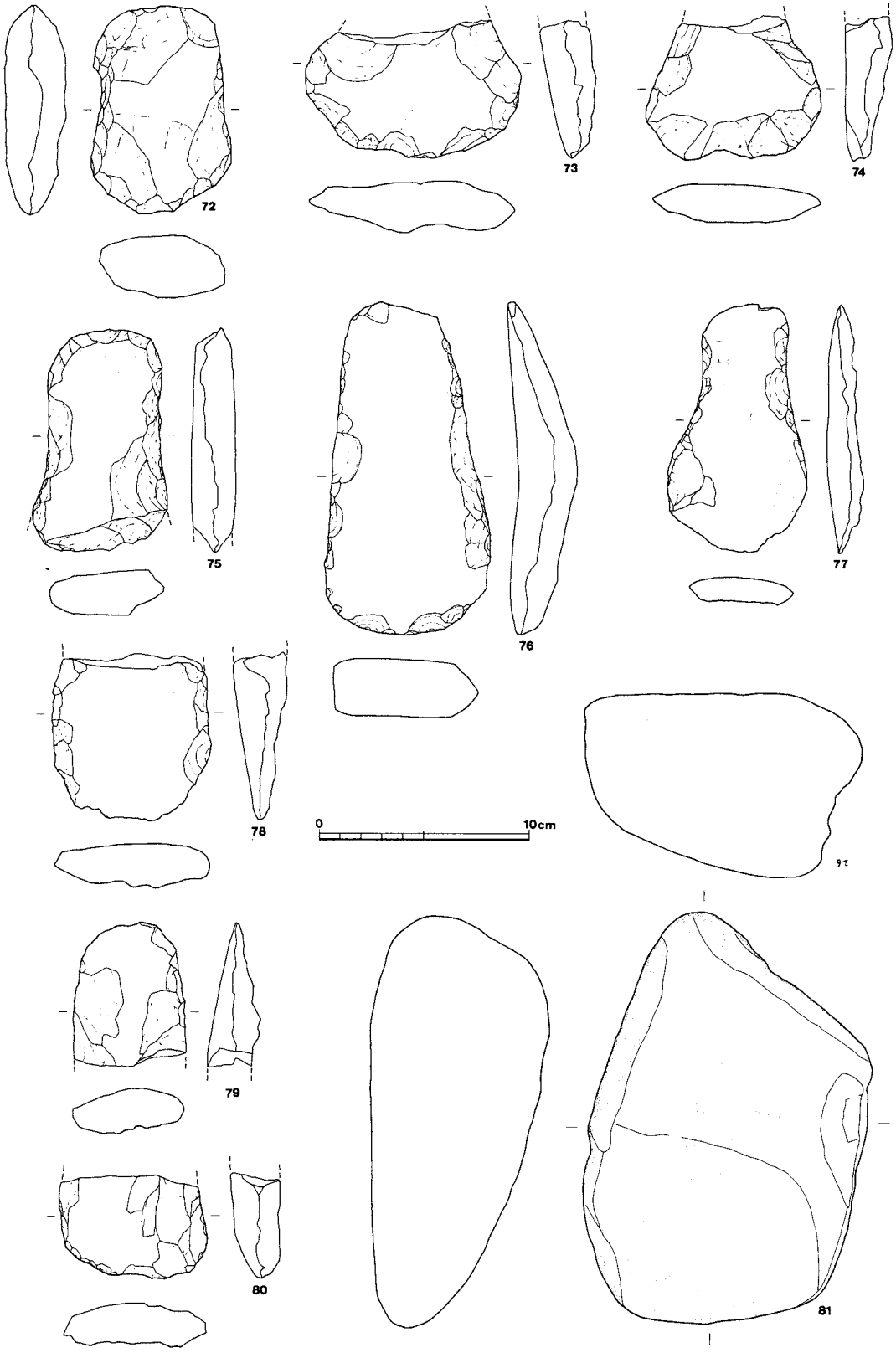
第19図　第一次調査出土遺物



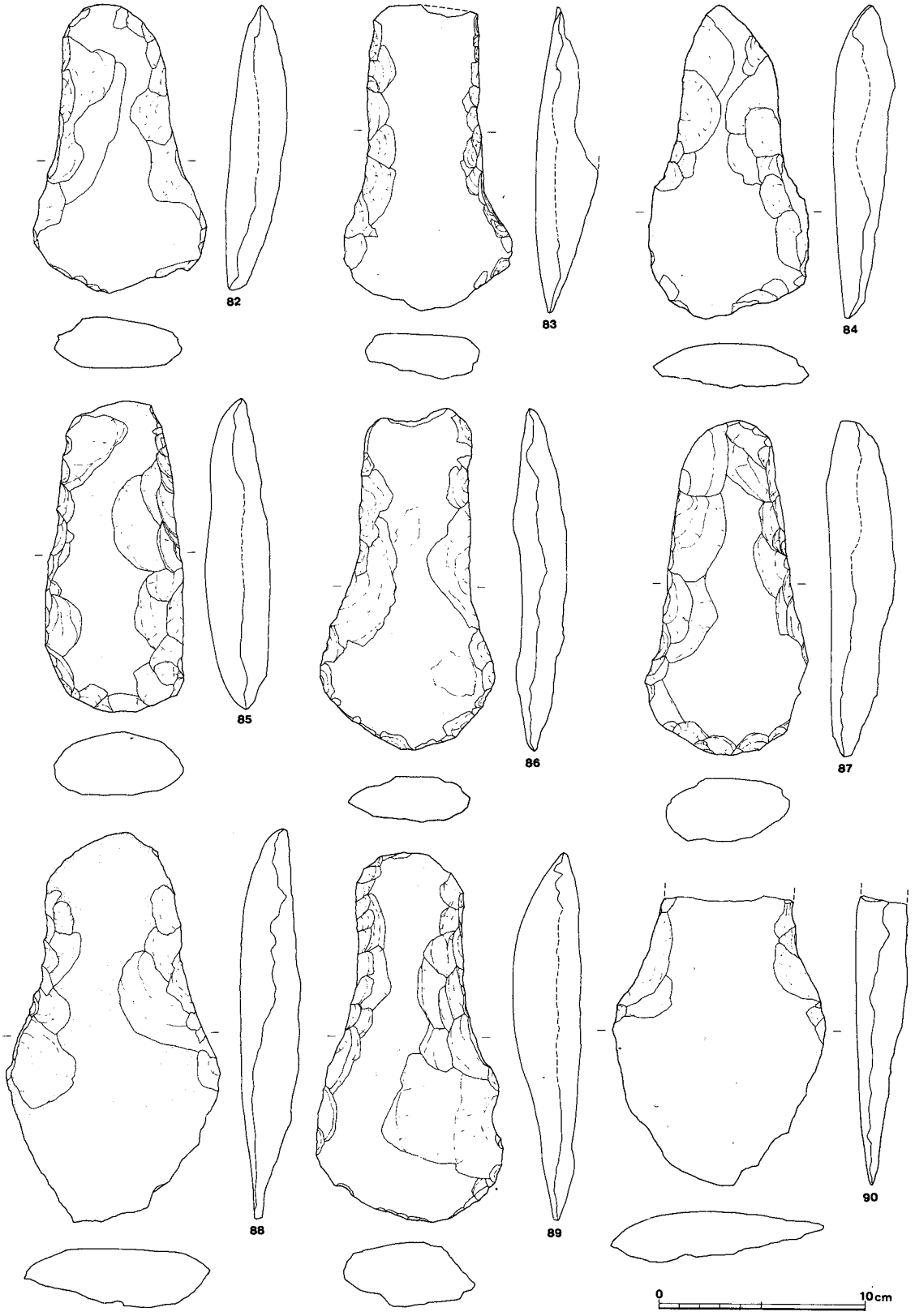
第20図　第一次調査出土遺物



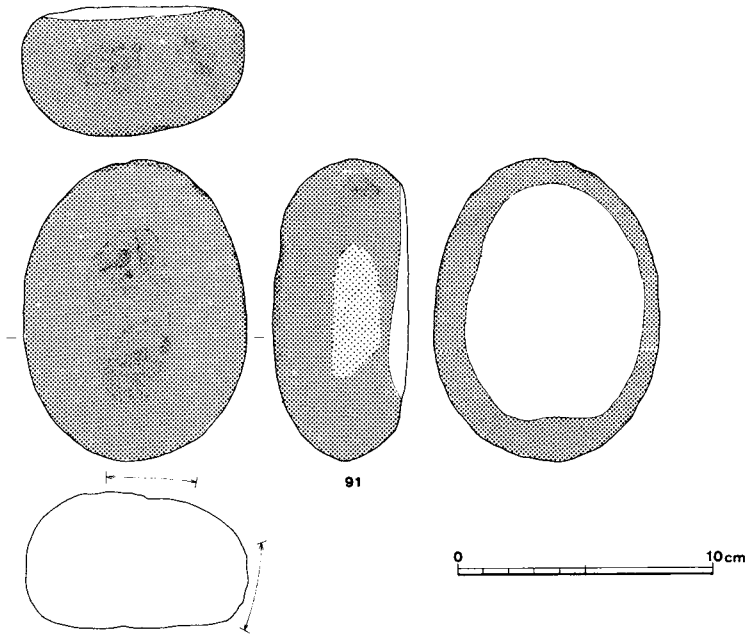
第21図　第一次調査出土遺物



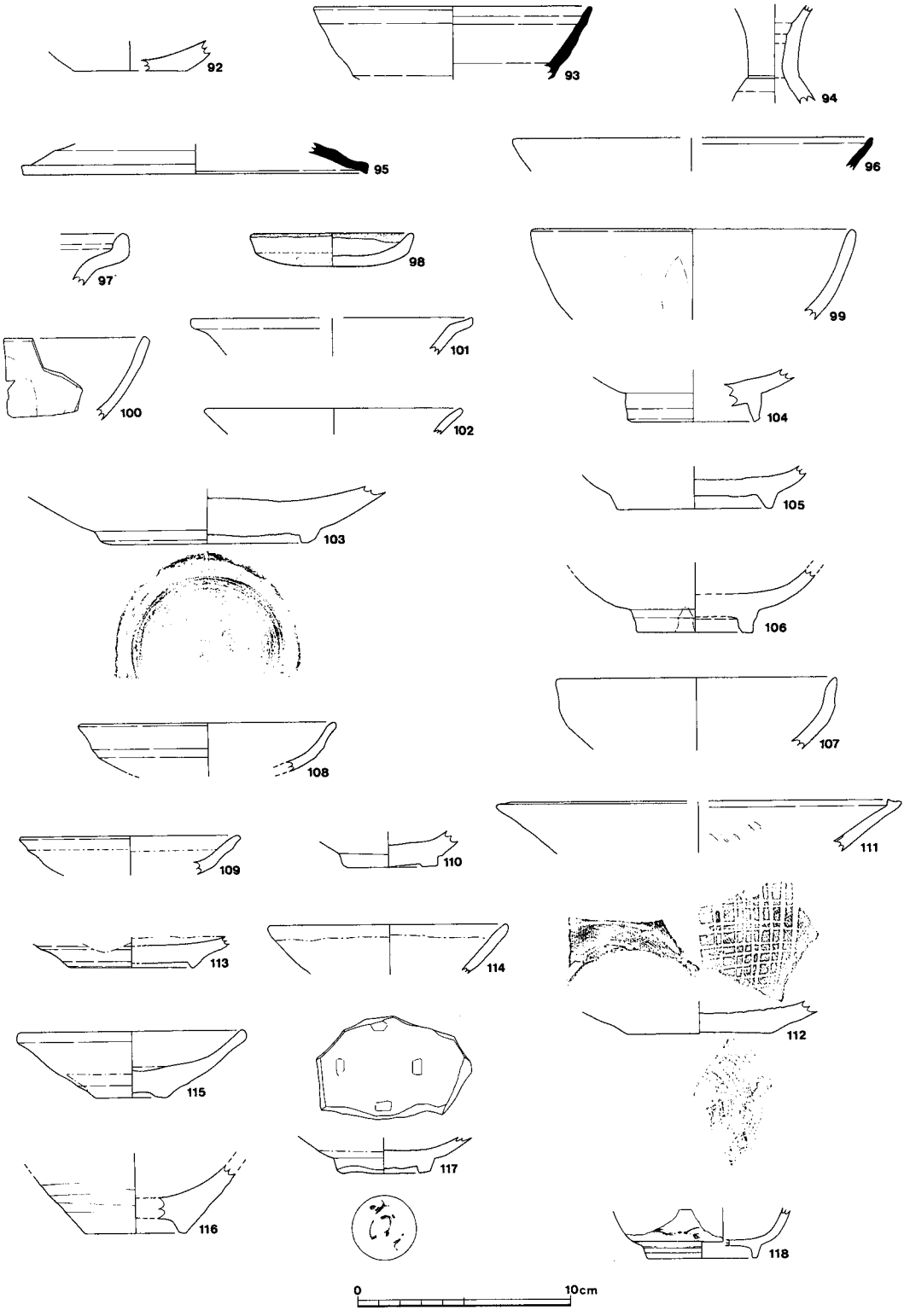
第22図　第一次調査出土遺物



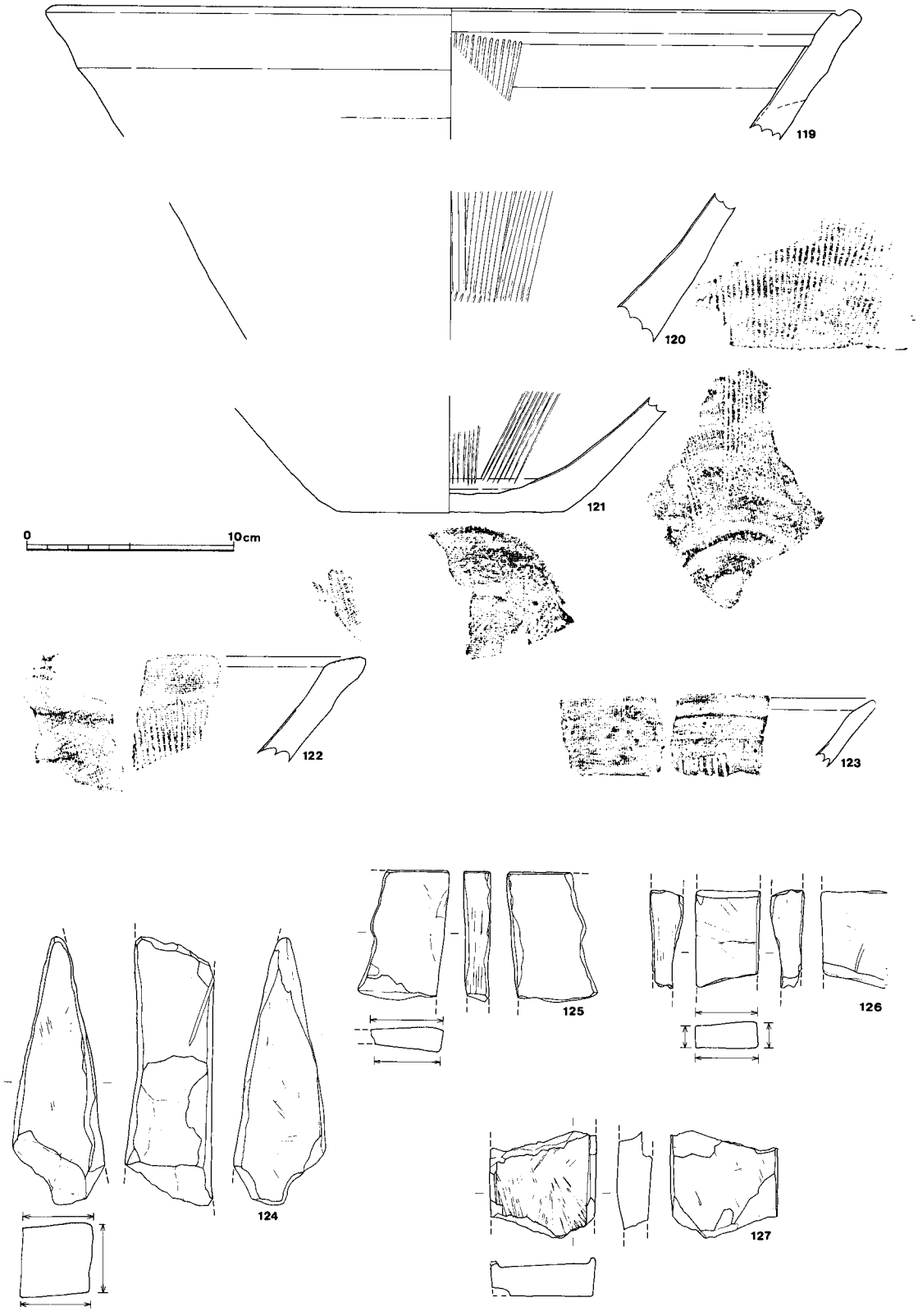
第23図　第一次調査出土遺物



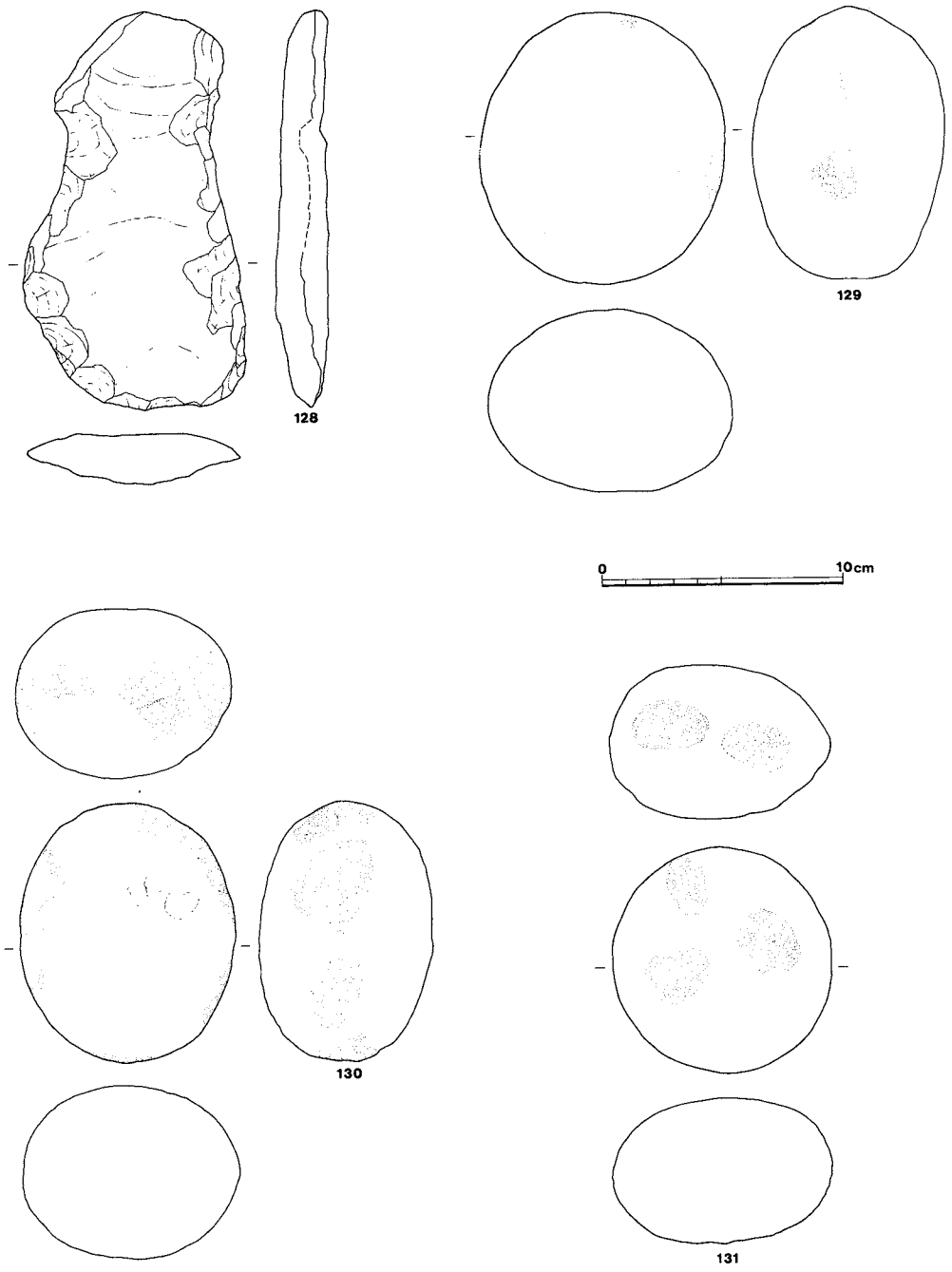
第24図　第一次調査出土遺物



第25図　第二次調査出土遺物



第26図　第二次調査出土遺物



第27図　第二次調査出土遺物

第5章　おわりに

調査区のほぼ全域で検出された縄文時代晩期の自然河道の底や岸から、完形品も含めて打製石斧が散発的に出土している。また、自然河道支流の川縁、ＳＸ４では台状の石を中心として比較的まとまった数の打製石斧が縄文時代晩期の深鉢と供に出土している。

野々市町の粟田遺跡では、鞍部おちぎわの礫上に完形品の打製石斧が５枚重なって出土している。出土状態より、替え刃として作業場に持ち込まれたものが何らかの理由により遺棄されたものであり、埋納されたと考えられるものではないという。ＳＸ４の打製石斧は替え刃であるのか柄に付いたままであるのかは不明であるが、粟田遺跡と同様に何らかの理由により遺棄されたものであると考えられる。

集落外に欠損品ばかりでなく、完形品の打製石斧が廃棄されるという背景について、山本直人氏の指摘するように、打製石斧の石材の入手が容易なうえ、製作が簡単で大量生産しやすく、使い捨ての消耗品としての性格があったことが考えられる。手取川扇状地の扇側部にあたる本遺跡は、縄文時代晩期の地山面に所々礫層が表れており、打製石斧の石材には困らなかったであろう。また、白山の山々から運ばれてきたそれらの礫は手頃な大きさの川原石で、石材も加工しやすいものが多い。加工方法も川原石を割って楕円形の剝片をとり、その両端を打ち欠きくびれ部を作り出し、必要なものだけ更に刃を付けるという比較的簡単なものである。

手取川扇状地で打製石斧が散発的に出土する遺跡について、「食料源としての根茎類や球根類を採集する目的で営まれ、場所を転々とかえるような出作り小屋的な性格」が指摘されている。本遺跡でも、ＳＸ４以外の自然河道周辺では打製石斧が散発的に出土しており、これらは採集活動中に折れたり紛失したものと推定される。

ＳＸ４は大きく蛇行する自然河道支流の内側の川縁に位置しており、川の水を利用した作業をするには適した場所である。台状の石やほぼ完形に近い深鉢が共伴して出土しており、おそらく、そこでは自然河道周辺で採集した根茎類や球根類を集落本体まで持ち帰るための水を必要とする何らかの加工が行われていたと思われる。つまり、自然河道周辺が採集場所でＳＸ４が集積、加工場所であったと推測される。そして、そこには消耗品的性格のある打製石斧や土器は常備されており、人は最小限のもの（採集品の加工品）だけを携え移動していたのではないか。その後、何らかの理由により人の移動が途絶え、作業場が利用されなくなり、作業場と共に打製石斧や土器も遺棄されたと考えられる。

しかし、今回の発掘調査の成果からは前述したＳＸ４の性格は推測の域を出ていない。さらに、ＳＸ４周辺の土壌分析や、土壌洗浄により剝片を探し出すといった調査は行っていない。今後、手取川扇状地での発掘調査量の増加が予想され、それに伴い集落外で打製石斧が散発的、あるいは集中的に出土する例が増えてゆくであろう。今後の調査に期待をし、成果を十分にまとめきれなかった担当者の力量不足を提示することで報告を終わりたい。

＜参考、引用文献＞

１９９１『粟田遺跡発掘調査報告書』社団法人　石川県埋蔵文化財保存協会

山本直人１９８５「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会会誌第２８号』石川考古学研究会

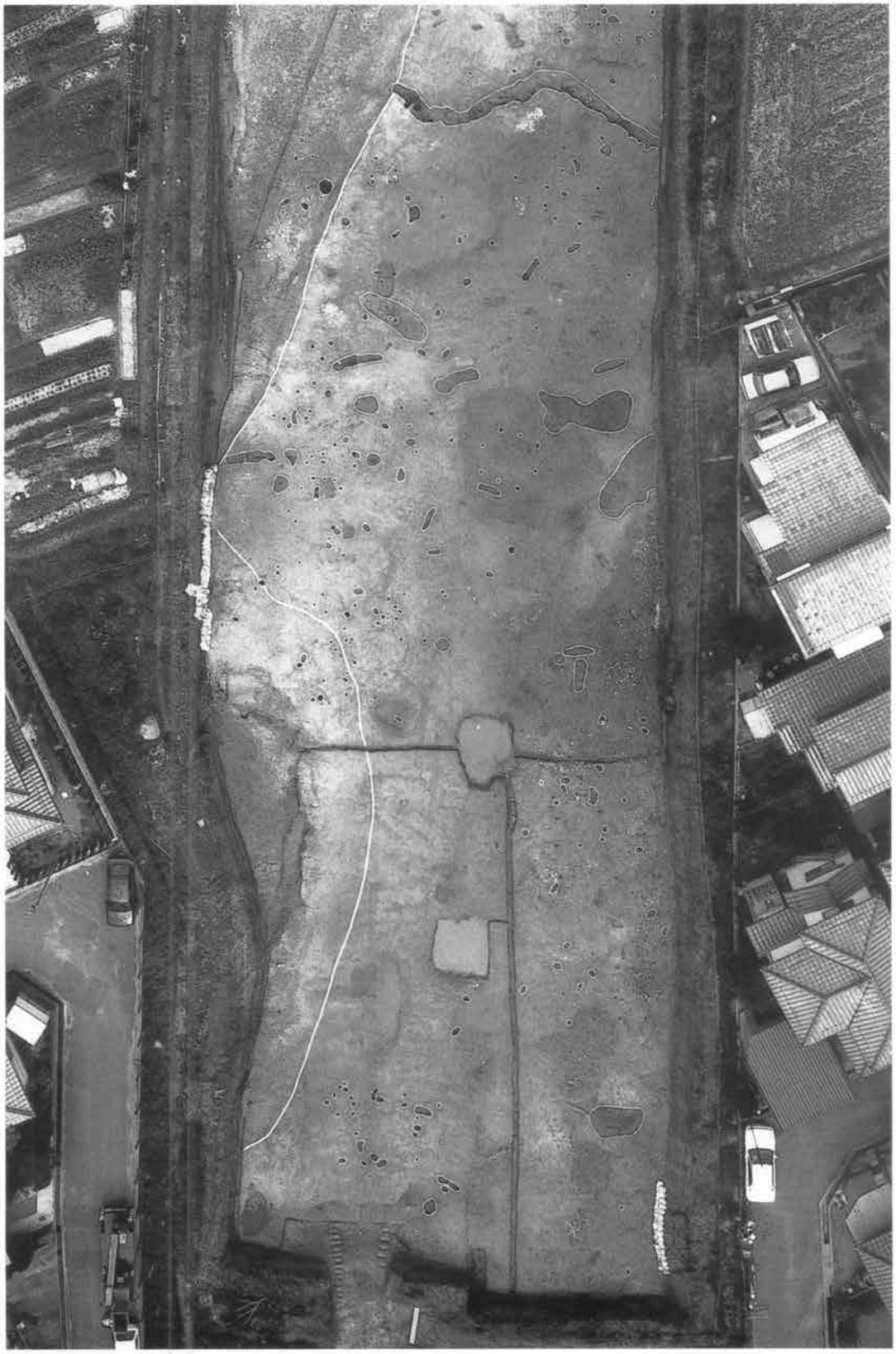
山本直人１９９３「縄文時代後・晩期の打製石斧による生産活動－手取川扇状地を中心として－」

『考古論集－潮見　浩先生退官記念論文集－』潮見　浩先生退官記念事業会

遺跡周辺の航空写真

図版二

第一次調査区



第一次調査区

図版四

第二次調査区

遺跡遠景（上流側より）

調査開始前（上流側より）

図版六

第一次調査区遠景（下流側から）

第一次調査区遠景（上流側から）

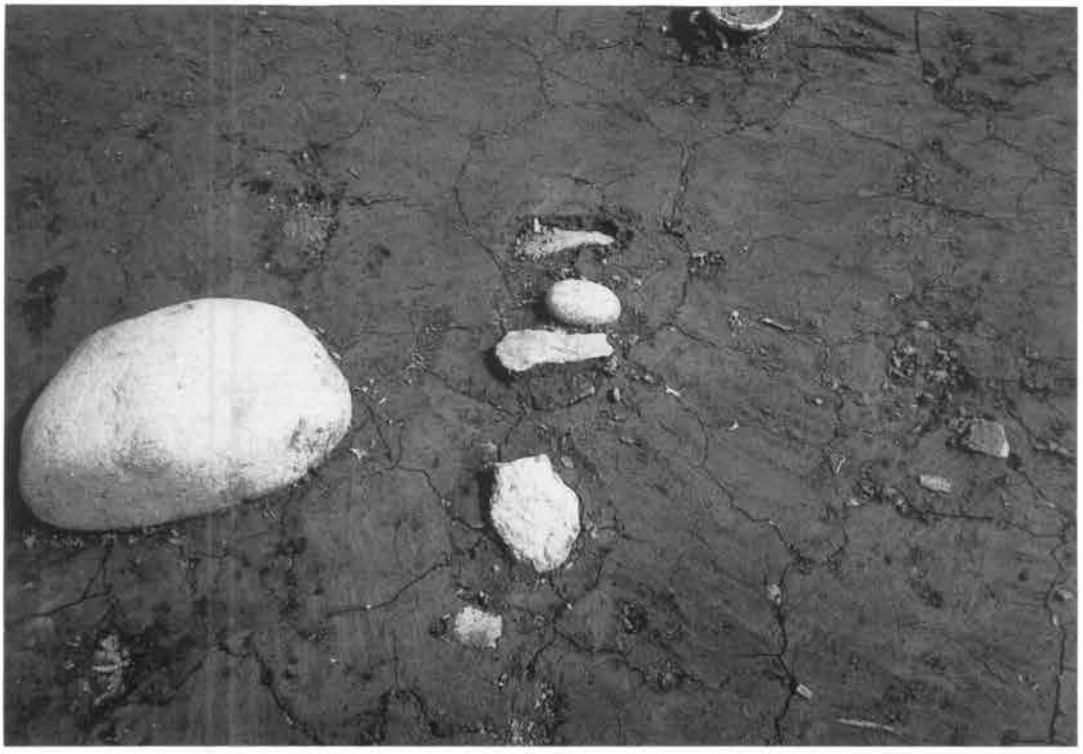
SX4　遠　　景

SX4　近　　景

ＳＸ４　近　　景

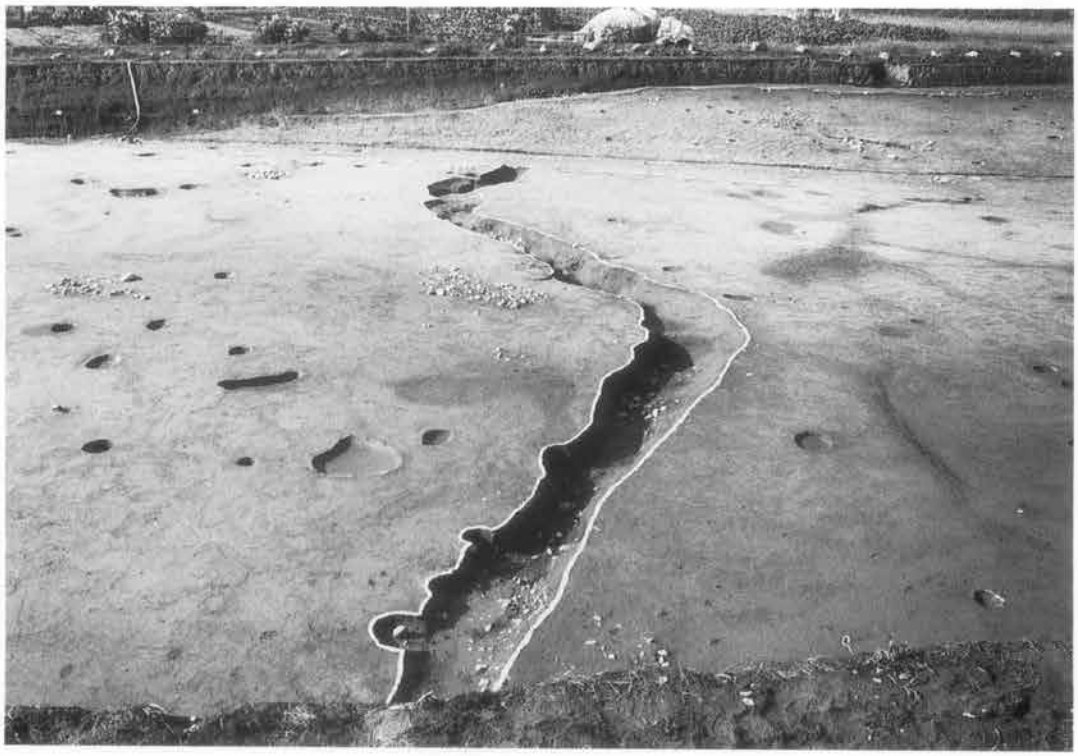
ＳＸ４　土器１　出土状況

ＳＸ４　打製石斧出土状況

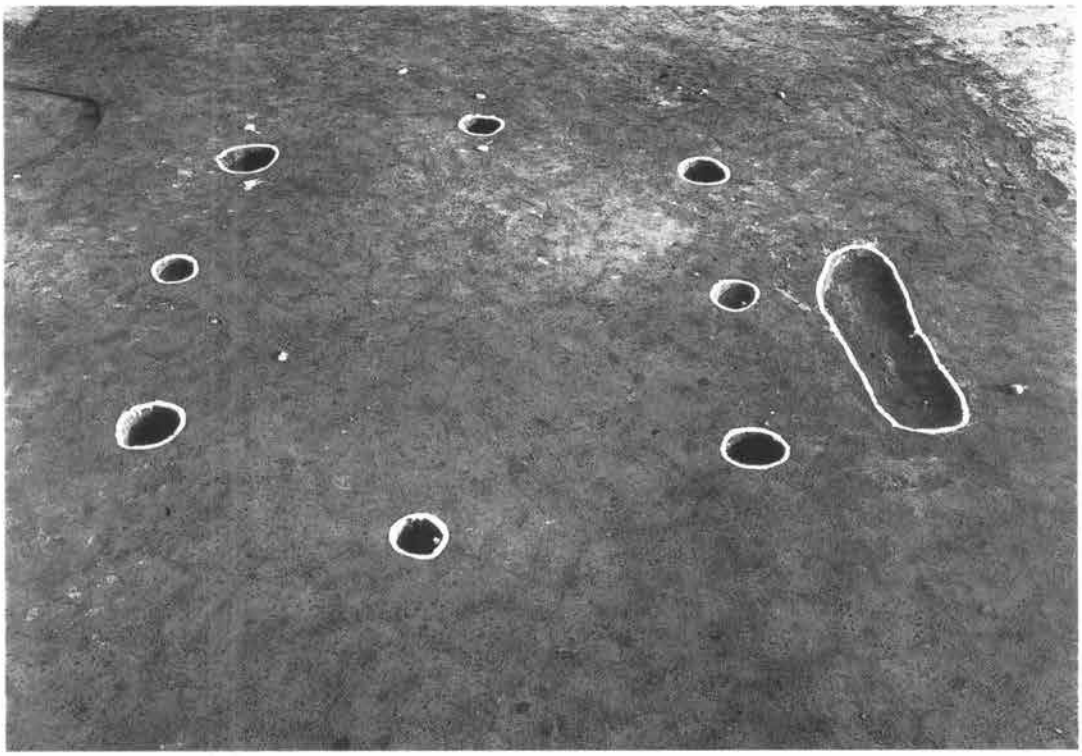


ＳＸ４　打製石斧出土状況

ＳＫ２　調査風景



ＳＤ３　（東より）

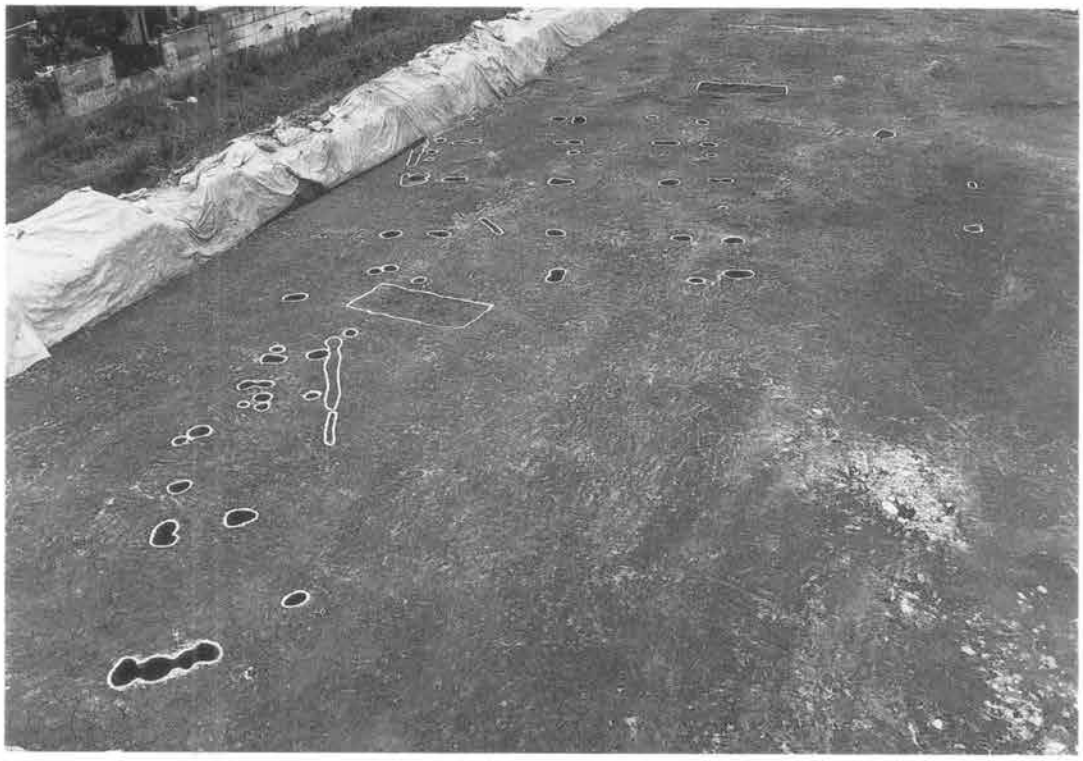


竪穴住居跡

竪穴住居跡　Ｐ８

第二次調査区全景（平安時代の遺構面）

ＳＢ201　及び　ＳＤ201，202



ＳＢ201（下流側から）

ＳＢ201（東から）

第二次調査区（鎌倉・室町時代の遺構面）

第二次調査区（自然河道）

57

58

59

60

61

62

63

65

64

図版十六

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

1

79

80

82

83

84

85

86

87

88

89

90

55

56

91

129

130

131

報告書抄録

ふりがな	おうぎがおかはわいごくいせき
書名	扇が丘ハワイゴク遺跡
副書名	伏見川中小河川改良工事（高橋川）に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	木立雅朗・端　猛
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921 石川県金沢市米泉町４丁目133番地　TEL　0762-43-7692
発行年月日	西暦　1995年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
おうぎがおか 扇が丘ハワイゴク遺跡	いしかわけんかなざわし 石川県金沢市 まがえいっちょうめ 馬替１丁目 いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 ののいちまち 野々市町 おおぎがおか 扇が丘	17201 17344	01122 16043	36° 31′ 30″	136° 37′ 40″	19900702 ～ 19901110 19910422 ～ 19910723	4,800	河川改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
扇が丘ハワイゴク	集落跡	縄文晩期 弥生末 古代 中世 近世	自然河道 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝 土坑	縄文土器、石器 弥生土器 須恵器、土師器 中・近世陶磁器	縄文時代晩期の自然河道を検出。平安時代の庇付き総柱建物跡を検出。

扇が丘ハワイゴク遺跡

伏見川中小河川改良工事（高橋川）に係る

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成７年３月30日　発　行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉４丁目133番地

電話（0762）43－7692

印　　刷　能登印刷株式会社

石川県金沢市武蔵７－10